

Sun Server X3-2 (旧 Sun Fire X4170 M3)

Linux オペレーティングシステムインストールガイド

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS. Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用了ことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は、The Open Group の登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

このドキュメントの使用方法	5
最新のソフトウェアとファームウェアの入手	5
このドキュメントについて	6
関連ドキュメント	6
フィードバック	6
サポートとアクセシビリティ	7
Linux オペレーティングシステムのインストールについて	9
関連情報	9
サポートされている Linux オペレーティングシステム	10
Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux	10
コンソール表示オプションの選択	12
ブートメディアオプションの選択	14
インストール先オプションの選択	17
Linux OS のインストールオプション	18
Oracle System Assistant の概要	20
オペレーティングシステムのインストールの準備	23
BIOS の設定	23
ネットワーク接続をサポートするための SLES 11 SP1 オペレーティングシステム ソフトウェアの構成	28
RAID の構成	30
Linux オペレーティングシステムのインストール	31
Oracle System Assistant を使用した Linux OS の単一システムへのインストール	31
メディアを使用した Oracle Linux の単一システムへのインストール	35
メディアを使用した Red Hat Enterprise Linux の単一システムへのインス トール	67
メディアを使用した SUSE Linux Enterprise Server の単一システムへのインス トール	83
ネットワークインタフェースの構成	101
NIC コネクタ	101

サーバーファームウェアとソフトウェアの入手	103
ファームウェアとソフトウェアのアップデート	103
ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション	104
入手可能なソフトウェアリリースパッケージ	104
ファームウェアとソフトウェアへのアクセス	106
更新のインストール	110
 索引	 113

このドキュメントの使用方法

このインストールガイドでは、Linux オペレーティングシステムのインストール手順と、Oracle の Sun Server X3-2 を構成可能かつ使用可能な状態にするためのソフトウェアの初期構成に関する手順について説明します。

注 – Sun Server X3-2 は以前は Sun Fire X4170 M3 サーバーという名前でした。この以前の名前が、まだソフトウェアに表示されることがあります。新しい製品名は、システム機能の変更を示すものではありません。

このドキュメントは、技術者、システム管理者、承認サービスプロバイダ (ASP)、およびオペレーティングシステムのインストールについての経験を持つユーザーを対象としています。

このセクションでは、最新のソフトウェアとファームウェア、ドキュメントとフィードバック、およびサポートとアクセシビリティ情報の入手方法を説明します。

- 5 ページの「最新のソフトウェアとファームウェアの入手」
- 6 ページの「このドキュメントについて」
- 6 ページの「関連ドキュメント」
- 6 ページの「フィードバック」
- 7 ページの「サポートとアクセシビリティ」

最新のソフトウェアとファームウェアの入手

各 Oracle x86 サーバー、サーバーモジュール (ブレード)、およびブレードシャーシ用のファームウェア、ドライバ、その他のハードウェア関連ソフトウェアは定期的に更新されます。

最新バージョンは次の 3 つのうちいずれかの方法で入手できます。

- Oracle System Assistant – Oracle x86 サーバーの出荷時にインストール済みの新規オプションです。必要なすべてのツールとドライバが含まれており、サーバーに組み込まれています。
- My Oracle Support: <http://support.oracle.com>

- 物理メディアの申請

詳細については、[103 ページ](#)の「サーバーファームウェアとソフトウェアの入手」を参照してください。

このドキュメントについて

このドキュメントセットは、PDF および HTML の両形式で利用できます。情報は(オンラインヘルプと同様の)トピック単位の形式で提供されるので、章、付録、セクション番号はありません。

特定のトピック(ハードウェア設置やプロダクトノートなど)に関するすべての情報が含まれる PDF 版を生成するには、HTML ページの左上隅にある PDF ボタンをクリックします。

関連ドキュメント

ドキュメント	リンク
すべての Oracle ドキュメント	http://www.oracle.com/documentation
Sun Server X3-2	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=SunServerX3-2
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31
Oracle Hardware Management Pack 2.2	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ohmp

フィードバック

次のサイトでこのドキュメントについてのフィードバックをお送りいただけます:

<http://www.oracle.com/goto/docfeedback>

サポートとアクセシビリティ

説明	リンク
My Oracle Support を通じた電子的なサポートへのアクセス	http://support.oracle.com 聴覚障害の方へ: http://www.oracle.com/accessibility/support.html
アクセシビリティに対する Oracle のコミットメントについて	http://www.oracle.com/us/corporate/accessibility/index.html

Linux オペレーティングシステムのインストールについて

注 - Sun Server X3-2 は以前は Sun Fire X4170 M3 サーバーという名前でした。この以前の名前が、まだソフトウェアに表示されることがあります。新しい製品名は、システム機能の変更を示すものではありません。

このセクションでは、サーバーに新しい Linux オペレーティングシステム (OS) をインストールする手順の概要を説明します。

説明	リンク
どの Linux オペレーティングシステムがサポートされているかを学習します。	10 ページの「サポートされている Linux オペレーティングシステム」
Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux とそれを使用できる場合について学習します。	10 ページの「Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux」
コンソール表示オプションとそれらの設定方法について学習します。	12 ページの「コンソール表示オプションの選択」
ブートメディアオプションとそれらの設定方法について学習します。	14 ページの「ブートメディアオプションの選択」
インストール先オプションとそれらの設定方法について学習します。	17 ページの「インストール先オプションの選択」
OS のインストールオプションについて学習します。	18 ページの「Linux OS のインストールオプション」
Oracle System Assistant について学習します。	20 ページの「Oracle System Assistant の概要」

関連情報

- [31 ページの「Linux オペレーティングシステムのインストール」](#)

サポートされている Linux オペレーティングシステム

サーバー は次の Linux オペレーティングシステムをサポートしています。

Linux OS のバージョン	版
Oracle	Oracle Linux 5.7、5.8、6.1、6.2、および 6.3 for x86 (64 ビット) と Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 1 for Linux または Red Hat と互換性のあるカーネル
Red Hat	Red Hat Enterprise Linux 5.7、5.8、6.1、6.2、および 6.3 for x86 (64 ビット)
SUSE	SUSE Linux Enterprise Server 11 SP1 および SP2 (64 ビット)

ほかのオペレーティングシステムについても、サーバーの初回リリース後にサポートを開始する予定です。更新情報については、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=SunServerX3-2> にある最新バージョンの『Sun Server X3-2 プロダクトノート』を参照してください。

関連情報

- 31 ページの「Linux オペレーティングシステムのインストール」

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux

Oracle では、特に Oracle ソフトウェアを実行している場合は、Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux を Linux 環境に配備することを強くお勧めします。また、サードパーティー製のソフトウェアやハードウェアを使用するお客様には、このカーネルをお勧めします。ただし、Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux はオプションであり、厳密な RHEL 互換性を求めるお客様のために、Oracle Linux には、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) のソースコードから直接コンパイルされた、Red Hat と互換性があるカーネルが引き続き含まれます。

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux は、2つのバージョンで使用できるようになりました。カーネルの最初のリリース、Oracle Unbreakable Enterprise Kernel (Release 1) for Linux は、デフォルトで Oracle Linux 5.7、5.8、6.1、および 6.2 にインストールされており、Red Hat Enterprise Linux 5.7、5.8、6.1、6.2、および 6.3 にインストールできます。カーネルの 2 番目のリリース、Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux は、Oracle Linux 5.8 および 6.2 にインストールでき、デフォルトで Oracle Linux 6.3 にインストールされており、Red Hat Enterprise Linux 5.8、6.2、および 6.3 にインストールできます。Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux をインストールしたあとで、Red Hat と互換性のあるカーネルに切り替えることもできます。

詳細については、次のセクションを参照してください。

- 11 ページの「[Oracle Unbreakable Enterprise Kernel \(Release 1\) for Linux](#)」
- 11 ページの「[Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux](#)」

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel (Release 1) for Linux

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 1 for Linux は、Oracle の最適化された、Oracle Linux 5 および Oracle Linux 6 用のオペレーティングシステムカーネルの最初のメジャーリリースです。これは 2.6.32 メインライン Linux カーネルに基づいており、安定性と最適性能を確保するために Oracle によって開発された最適化が含まれています。Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 1 for Linux はデフォルトで Oracle Linux 5.7、5.8、6.1、および 6.2 にインストールされています。

関連情報

- Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux の利点と機能の詳細については、次を参照してください。
 - Oracle Linux With Oracle Unbreakable Enterprise Kernel のデータシート:<http://www.oracle.com/us/technologies/linux/unbreakable-enterprise-kernel-ds-173416.pdf>
 - Oracle Linux 製品の概要の Web ページ:<http://www.oracle.com/us/technologies/linux/product/overview/index.html>
- 31 ページの「[Linux オペレーティングシステムのインストール](#)」

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux は、Oracle の厳しいテストを受け最適化された、Oracle Linux 5 および Oracle Linux 6 用のオペレーティングシステムカーネルの 2 番目のメジャーリリースです。これは 3.0 メインライン Linux カーネルに基づいており、Release 1 のカーネル以降にメインライン Linux に組み込まれた改良点と新機能が含まれています。Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux は Oracle Linux 5.8 および 6.2 にインストールでき、デフォルトで Oracle Linux 6.3 にインストールされています。

関連情報

- Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux のオペレーティングシステムの互換性とインストール情報の参照先についての最新情報は次を参照してください。

- Unbreakable Enterprise Kernel R.2 for Oracle Linux の機能と利点: <http://www.oracle.com/us/technologies/linux/uek-r2-features-and-benefits-1555063.pdf>
- Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 のリリースノート: <http://oss.oracle.com/ol6/docs/RELEASE-NOTES-UEK2-en.html>
- Oracle Linux 製品の概要の Web ページ: <http://www.oracle.com/us/technologies/linux/product/overview/index.html>
- 31 ページの「Linux オペレーティングシステムのインストール」

コンソール表示オプションの選択

このセクションでは、インストールを実行するためにコンソールを接続するオプションについて説明します。

- 12 ページの「コンソール表示オプション」
- 12 ページの「ローカルコンソールを設定する」
- 13 ページの「リモートコンソールを設定する」

コンソール表示オプション

ローカルコンソールをサーバーのサービスプロセッサ (SP) に直接接続することにより、OS のインストールやサーバーの管理を実行できます。サーバーでは、2 種類のローカルコンソールをサポートしています。

- シリアル管理ポート (SER MGT) に接続された端末
端末を、ポートに直接接続することも、ポートに直接接続した端末エミュレータに接続することもできます。
- ビデオポート (VGA) と 2 つの背面 USB コネクタに直接接続した VGA モニター、USB キーボード、および USB マウス

サーバー SP へのネットワーク接続を確立することにより、リモートコンソールから OS のインストールやサーバーの管理を行うこともできます。2 種類のリモートコンソールがあります。

- Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションを使用した Web ベースのクライアント接続
- ネットワーク管理ポート (NET MGT) への SSH クライアント接続

▼ ローカルコンソールを設定する

- 1 ローカルコンソールを接続するには、次のいずれかを実行します。

- 直接または端末エミュレータを介して、シリアル管理ポート (SER MGT) に端末を接続します。
 - VGA モニター、キーボード、およびマウスをビデオポート (VGA) および USB ポートに接続します。
- 2 シリアル管理ポート (SER MGT) 接続の場合のみ、ホストシリアルポートへの接続を確立するには:
 - a. Oracle ILOM のユーザー名およびパスワードを入力します。
 - b. Oracle ILOM プロンプトで、次を入力します。

-> **start /HOST/console**

シリアル管理ポート出力は、Linux ホストシリアルローカルコンソールに自動的にルーティングされます。

参考 関連情報

- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ドキュメントライブラリ:<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31>

▼ リモートコンソールを設定する

- 1 サーバー SP の IP アドレスを表示または設定します。
詳細は、『設置』、「サーバー SP の IP アドレスの確認」を参照してください。
- 2 Web ベースのクライアント接続を使用している場合は、これらの手順を実行します。それ以外の場合は次の手順に進みます。
 - a. Web ブラウザで、サーバー SP の IP アドレスを入力します。
 - b. Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
 - c. Oracle ILOM リモートコンソールを起動して、ビデオ出力をサーバーから Web クライアントにリダイレクトします。
 - d. 必要に応じて、「Devices」メニューでデバイスのリダイレクト(マウス、キーボードなど)を有効にします。
- 3 SSH クライアント接続を使用している場合は、次の手順を実行します。
 - a. シリアルコンソールから、サーバー SP への SSH 接続を確立します (**ssh root@hostname**。ここでは、*hostname* はサーバー SP の DNS 名または IP アドレス)。

- b. **Oracle ILOM** にログインします。
- c. 次を入力して、シリアル出力をサーバーから **SSH** クライアントにリダイレクトします:
-> **start /HOST/console**

参考 関連情報

- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ドキュメントライブラリ:<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31>

ブートメディアオプションの選択

サーバーへのオペレーティングシステムのインストールを開始するには、ローカルまたはリモートのインストールメディアソースをブートします。このセクションでは、サポートされているメディアソースと各ソースのセットアップ要件について説明します。

- 14 ページの「ブートメディアオプションの要件」
- 15 ページの「ローカルブートメディアオプションを設定する」
- 15 ページの「リモートブートメディアオプションを設定する」

ブートメディアオプションの要件

このセクションでは、ローカルおよびリモートメディアを使用するための要件について説明します。

- 14 ページの「ローカルブートメディアの要件」
- 15 ページの「リモートブートメディアの要件」

ローカルブートメディアの要件

ローカルブートメディアでは、サーバー上の組み込み型ストレージデバイスまたはサーバーに接続された外付けのストレージデバイスが許可されています。

CD/DVD インストールメディアは、次のどの方法でも使用できます。

- インストールメディア CD/DVD は、サーバー DVD ドライブに挿入できます。
- インストールメディア CD/DVD は、サーバーに接続している外付け DVD ドライブに挿入できます。
- インストールメディアは、USB フラッシュドライブにコピーして、サーバーの外付け USB ポートか内蔵 USB ポートのいずれかに挿入できます。

リモートブートメディアの要件

リモートメディアでは、ネットワークを介してインストールをブートする必要があります。ネットワークインストールは、リダイレクトされたブートストレージデバイスか、Pre-boot eXecution Environment (PXE) を使用してネットワーク上にインストールをエクスポートする別のネットワークシステムから開始できます。

サポートされている OS のリモートブートメディアソースには、次のものがあります。

- リモート DVD ドライブに挿入された CD/DVD-ROM インストールメディア
- 仮想リダイレクション用に設定されたネットワーク上の場所で使用できる DVD/ISO イメージ
- PXE ネットワークブートとして使用できるようにした DVD/ISO イメージ

▼ ローカルブートメディアオプションを設定する

ローカルブートメディアを設定するには、この手順を実行します。

- 使用しているサーバーに組み込み型ストレージデバイスがない場合は、サーバーの前面または背面パネルに適切なストレージデバイスを接続します。
ローカルデバイスをサーバーに接続する方法については、『設置』の「サーバーへのデータケーブルと電源コードの接続」を参照してください。

▼ リモートブートメディアオプションを設定する

リモートの場所にあるメディアから OS をインストールするには、これらの手順を実行します。

- 1 リモートストレージデバイスからブートメディアをリダイレクトするには、以下の手順を実行します。それ以外の場合は次の手順に進みます。
 - a. ブートメディアを、次のようなストレージデバイスに挿入します。
 - **CD/DVD-ROM** の場合、リモートワークステーション上の組み込み型または外付けの CD/DVD-ROM ドライブにメディアを挿入します。
 - **CD/DVD-ROM ISO** イメージの場合、ネットワーク共有された場所で ISO イメージがすぐに利用できることを確認します。
 - デバイスドライバフロッピーの **IMG** イメージの場合、IMG イメージが(該当する場合)ネットワーク共有された場所または USB ドライブ上ですぐに利用できることを確認します。

- b. サーバー **Oracle ILOM SP** への **Web** ベースのクライアント接続を確立し、**Oracle ILOM** リモートコンソールアプリケーションを起動します。

詳細は、[12 ページの「コンソール表示オプションの選択」](#)に示す Web ベースのクライアント接続に関するセットアップ要件を参照してください。

- c. **Oracle ILOM** リモートコンソールアプリケーションの「**Devices**」メニューで、次のようなブートメディアの場所を指定します:

- **CD/DVD-ROM** ブートメディアの場合は、「**CD-ROM**」を選択します。
- **CD/DVD-ROM ISO** イメージブートメディアの場合は、「**CD-ROM Image**」を選択します。
- フロッピーデバイスドライバブートメディアの場合は、「**Floppy**」を選択します (該当する場合)。
- フロッピーイメージのデバイスドライバブートメディアの場合は、「**Floppy Image**」を選択します (該当する場合)。

2 PXE を使用してインストールを実行するには、次の手順を実行します。

- a. **PXE** ブートを使用して、インストールをエクスポートするようにネットワークサーバーを構成します。

- b. **OS** インストールメディアを **PXE** ブートで利用できるようにします。

自動 OS インストールイメージを使用する場合は、次のような自動 OS インストールイメージを作成して指定する必要があります。

- RHEL KickStart イメージ

- SLES AutoYaST イメージ

インストールのセットアッププロセスを自動化する方法については、オペレーティングシステムベンダーのドキュメントを参照してください。

- c. インストールメディアをブートするには、一時ブートデバイスとして **PXE** ブートインタフェースカードを選択します。

詳細は、このガイドで説明した **PXE** ベースのオペレーティングシステムインストール手順を参照してください。たとえば、**Oracle Linux 5.7** または **6.1 PXE** ベースのインストールの場合は、[64 ページの「PXE ネットワークブートを使用した Oracle Linux 5.7、5.8、6.1、6.2、または 6.3 のインストール」](#)を参照してください。

インストール先オプションの選択

このセクションでは、インストール先を設定する方法について説明します。

- 17 ページの「インストール先のオプション」
- 18 ページの「ローカルストレージドライブ (HDD または SSD) をインストール先として設定する」
- 18 ページの「インストール先としてファイバチャネル Storage Area Network デバイスを設定する」

インストール先のオプション

組み込み型の Oracle System Assistant USB フラッシュドライブ (Oracle System Assistant 用に予約されている) を除き、サーバーに取り付けたどのストレージドライブにもオペレーティングシステムをインストールできます。これらにはハードディスクドライブ (HDD) とソリッドステートドライブ (SSD) があります。

ファイバチャネル PCIe ホストバスアダプタ (HBA) を備えたサーバーでは、オペレーティングシステムを外付けの FC ストレージデバイスにインストールすることも選択できます。

重要: USB 組み込み型 Oracle System Assistant 内蔵フラッシュドライブは、ブートまたはストレージドライブとして使用しない

サーバーは、組み込み型 Oracle System Assistant USB フラッシュドライブを装備した状態で出荷されます。このドライブには、Oracle System Assistant、デバイスドライバ、および Oracle ILOM、BIOS、およびサポートされている IO デバイス用のファームウェアが含まれています。サポートされているすべてのオペレーティングシステムのインストール中に、この USB フラッシュドライブは、読み書き可能な単一パーティションの SCSI ディスクとして検出され、ドライブのリストには Oracle SSM と表示されます。次の操作を実行するときに、このデバイスを上書きしないように注意してください。

- オペレーティングシステムのインストール
- ディスクまたはパーティションのフォーマット操作
- 一般的なディスク、パーティション、またはファイルシステムの保守

この USB フラッシュドライブが上書きされた場合でも、元の内容を復元できます。USB フラッシュドライブの内容を復元するには、Oracle System Assistant 復旧および ISO 更新イメージを取得し、このイメージを使用して復元処理を実行します。

Oracle System Assistant 復旧および ISO 更新イメージをダウンロードし、サーバーの Oracle System Assistant USB フラッシュドライブを復元する手順については、『管理』の「Oracle System Assistant の復元」を参照してください。

▼ ローカルストレージドライブ (HDD または SSD) をインストール先として設定する

- HDD または SSD が正しく取り付けられ、電源が入っていることを確認します。
HDD または SSD の取り付けと電源の投入方法については、『サービス』の「ストレージドライブの保守 (CRU)」を参照してください。

▼ インストール先としてファイバチャネル Storage Area Network デバイスを設定する

- 1 サーバーに PCIe HBA が正しく取り付けられていることを確認します。
PCIe HBA オプションの設置方法については、Service, Servicing PCIe Cards (CRU) を参照してください。
- 2 Storage Area Network (SAN) をインストールおよび構成して、サーバーホストでストレージデバイスが認識されるようにします。
手順については、ファイバチャネル HBA 付属のドキュメントを参照してください。

Linux OS のインストールオプション

OS を単一のサーバーにインストールするか、複数のサーバーにインストールするかを選択できます。このドキュメントの適用範囲は、単一のサーバーでの OS のインストールです。次の表に、2つのインストールオプションに関する情報を示します。

オプション	説明
複数のサーバー	Oracle Enterprise Manager Ops Center を使用して、複数のサーバー上に OS をインストールできます。詳細は、 http://www.oracle.com/us/products/enterprise-manager/044497.html にアクセスしてください。

オプション	説明
単一のサーバー	<p>次のいずれかの方法を使用して、単一のサーバーに OS をインストールします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ローカル: OS のインストールは、サーバーでローカルに実行されます。このオプションは、物理的にラックにサーバーを設置し終えたばかりのときにお勧めします。 ■ リモート: OS のインストールはリモートの場所から実行されます。Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションを使用して、Oracle System Assistant にアクセスするか、手動による OS のインストールを実行します。 <p>注 - Oracle は、単一サーバーでの OS のインストールには Oracle System Assistant を使用することをお勧めします。</p>

単一サーバーに OS をインストールする方法と Oracle System Assistant の詳細については、次を参照してください:

- [19 ページの「サーバー 1 台構成のインストール方法」](#)
- [20 ページの「Oracle System Assistant の概要」](#)

サーバー 1 台構成のインストール方法

OS インストールメディアを用意する方法を選択します。次の情報を使用して、ローカルかリモートのどちらの OS のインストールがニーズにもっとも適しているかを判断します。

メディアの配布方法	その他の要件
ローカルでの補助付き OS インストール – Oracle System Assistant を使用します (推奨)。	モニター、USB キーボードおよびマウス、USB デバイス、および OS 配布メディア。詳細は、 20 ページの「補助付き Linux OS インストール」 を参照してください。
リモートでの補助付き OS インストール – Oracle System Assistant を使用します (推奨)。	Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーション、リダイレクトされた CD/DVD ドライブまたは ISO イメージファイル、および OS 配布メディア。詳細は、 20 ページの「補助付き Linux OS インストール」 を参照してください。

メディアの配布方法	その他の要件
ローカルでの CD/DVD ドライブの使用 – サーバーに接続した物理 CD/DVD ドライブを使用します。	モニター、USB キーボードおよびマウス、USB CD/DVD ドライブ、および OS 配布メディア。詳細は、 20 ページの「Linux OS の手動インストール」 を参照してください。
リモートでの CD/DVD の ISO イメージの使用 – Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションを実行しているリモートシステム上の、リダイレクトされた物理 CD/DVD ドライブまたは DVD ISO イメージを使用します。	リモートシステムとブラウザ、接続された物理 CD/DVD ドライブまたは ISO イメージファイル、OS 配布メディア、およびサーバーの管理ポートへのネットワークアクセス。詳細は、 20 ページの「Linux OS の手動インストール」 を参照してください。

補助付き Linux OS インストール

これは、サポートされている OS をサーバーにインストールするための推奨方法です。この方法では、Oracle System Assistant アプリケーションを使用します。ローカルまたはリモートの CD/DVD ドライブ、USB デバイス、CD/DVD イメージのいずれかで OS インストールメディアを配信すると、アプリケーションがプロセスを進め、必要に応じて必要なドライバを収集しインストールします。Oracle System Assistant は、使用しているサーバーでサポートされている必要があり、そのサーバーにインストールされている必要があります。

Linux OS の手動インストール

この方法では、ローカルまたはリモートの CD/DVD ドライブ、USB デバイス、または CD/DVD イメージで Linux OS 配布メディアを配信します。必要なドライバをインストールする必要もあります。サーバー用のドライバは、サーバー内の Oracle System Assistant フラッシュドライブ (取り付けられている場合) に用意されており、My Oracle Support サイトから OS およびサーバー別のパッケージか ISO イメージファイルとして入手することもできます。OS をインストールするには、配布メディアのインストールウィザードを使用します。

Oracle System Assistant の概要

Oracle System Assistant は、Oracle x86 サーバー向けの単一サーバーシステム管理ツールです。これは、Oracle の Single System Management 製品、Oracle System Assistant アプリケーション、および選り抜きの関連ソフトウェアを統合して、サーバーを迅速かつ簡単に起動し管理できるようにするツール群を提供します。Oracle System Assistant のコンポーネントは次のとおりです:

- Oracle System Assistant アプリケーション
- Oracle Hardware Management Pack
- 起動と保守のプロビジョニングタスク (OS のインストールタスクを含む) へのユーザーインタフェースアクセス

- Oracle System Assistant のコマンド行環境
- オペレーティングシステム用のソフトウェア、ドライバ、およびツール
- サーバー固有のファームウェア
- サーバー固有の関連ドキュメント

Oracle System Assistant は、組み込み型フラッシュドライブとしてサーバー内部に装備されています。ドライブは、すべてのコンポーネントのオンライン更新を使用することによりそれぞれ保守される、サーバー固有バージョンの Oracle System Assistant とともに出荷時に構成されています。

詳細は、次のトピックを参照してください。

- [21 ページの「Oracle System Assistant のタスクの概要」](#)
- [22 ページの「Oracle System Assistant の OS のインストールタスク」](#)
- [22 ページの「Oracle System Assistant の取得」](#)

詳細は、『管理』の「Oracle System Assistant を使用したサーバーの設定」を参照してください。

Oracle System Assistant のタスクの概要

Oracle System Assistant アプリケーションは、もっとも一般的で役立つ単一サーバー管理プロビジョニングタスクの選択したセットを組み合わせたものです。

次のタスクは、迅速で便利なサーバーの起動と継続的なサーバー管理を可能にします。

- システムの概要とシステムインベントリ情報
- すべてのコンポーネント (オペレーティングシステムソフトウェア、ツール、ドライバ、ファームウェアなど) のオンラインアップデートの取得
- システムファームウェア (BIOS および Oracle ILOM) とホストバスアダプタファームウェアの更新
- RAID、Oracle ILOM、および BIOS 構成
- 補助付き OS インストール
- サーバーネットワーク構成
- 機能と組み込まれたメディア整合性チェックの無効化
- 多言語キーボード
- 実行環境を使用可能にする Oracle System Assistant シェル端末ウィンドウ
- Oracle Hardware Management Pack へのアクセス (Oracle System Assistant シェルを使用)
- Oracle System Assistant の復旧

詳細は、『管理』、「Oracle System Assistant を使用したサーバーの設定」を参照してください。

Oracle System Assistant の OS のインストールタスク

Oracle System Assistant アプリケーションの OS のインストールタスクを実行すると、サポートされている OS をガイドに従ってインストールできます。OS インストールメディアを提供すると、Oracle System Assistant の手順に従ってインストールプロセスを実行できます。続いて、サーバーハードウェア構成に基づいて、適切なドライバをフェッチします。OS のインストールタスクは、サーバーでサポートされているすべてのオペレーティングシステムに使用できるわけではありません。

Oracle System Assistant を使用して、OS ドライバと他のファームウェアコンポーネント (BIOS、Oracle ILOM、HBA、および該当する場合はエクспанダ) を更新する場合は、OS をインストールする前にその更新を実行するようにしてください。

Oracle System Assistant には、ローカルコンソール接続を使用してローカルからアクセスすることも、Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションを使用してリモートからアクセスすることもできます。

サーバーのインストールが終了した直後の場合、Oracle System Assistant を (物理的にサーバーにいる間に) ローカルで使用することで、サーバーを迅速かつ効率的に起動できます。サーバーが動作すると、すべての機能を維持しながら、Oracle System Assistant にリモートで便利にアクセスできます。

詳細は、『管理』、「Oracle System Assistant を使用したサーバーの設定」を参照してください。

Oracle System Assistant の取得

サーバーは Oracle System Assistant をサポートしているので、Oracle System Assistant USB フラッシュドライブがすでにサーバーに取り付けられている可能性があります。インストールされている場合、Oracle System Assistant の「Get Updates」タスクを使用して、最新のソフトウェアリリースに更新できます。Oracle System Assistant がサーバーにインストールされているが、破壊または上書きされている場合は、My Oracle Support Web サイトから OSA アップデートイメージをダウンロードしてください。ダウンロード手順については、[103 ページの「サーバーファームウェアとソフトウェアの入手」](#)を参照してください。

関連情報

- 『管理』、「Oracle System Assistant を使用したサーバーの設定」

オペレーティングシステムのインストールの準備

このセクションでは、オペレーティングシステムをインストールできるようにサーバーを準備する方法について説明します。

説明	リンク
BIOS の設定。	23 ページの「BIOS の設定」
ネットワーク接続をサポートするための SLES 11 SP1 オペレーティングシステムの構成。	28 ページの「ネットワーク接続をサポートするための SLES 11 SP1 オペレーティングシステムソフトウェアの構成」
サーバーでの RAID 構成の設定。	30 ページの「RAID の構成」

BIOS の設定

オペレーティングシステムをインストールする前に、実行する予定のインストールの種類をサポートするように BIOS 設定が構成されていることを確認するようにしてください。次のトピックでは、インストールをサポートするように BIOS を構成する方法について具体的に説明しています。

- [24 ページの「BIOS の出荷時デフォルトの確認」](#)
- [26 ページの「レガシー BIOS と UEFI BIOS モードの切り替え」](#)

関連情報

- [31 ページの「Oracle System Assistant を使用した Linux OS の単一システムへのインストール」](#)
- [35 ページの「メディアを使用した Oracle Linux の単一システムへのインストール」](#)
- [67 ページの「メディアを使用した Red Hat Enterprise Linux の単一システムへのインストール」](#)
- [83 ページの「メディアを使用した SUSE Linux Enterprise Server の単一システムへのインストール」](#)

▼ BIOS の出荷時デフォルトの確認

注-新しく設置されたサーバーにはじめてオペレーティングシステムをインストールする場合、BIOSはおそらくデフォルトの設定になっているため、この手順を実行する必要はありません。

BIOS 設定ユーティリティーでは、最適なデフォルトに設定できるほか、必要に応じて BIOS 設定を表示し編集できます。BIOS 設定ユーティリティー (F2 キー) で変更した設定はすべて、次回に設定変更するまで常時使用されます。

F2 キーを使用してシステムの BIOS 設定を表示または編集できるほか、BIOS の起動中に F8 キーを使用することで、一時ブートデバイスを指定できます。F8 キーを使用して一時ブートデバイスを設定した場合、この変更は現在のシステムブートのみで有効です。一時ブートデバイスでブートしたあとは、F2 キーで指定した常時ブートデバイスが有効になります。

始める前に 次の要件が満たされていることを確認します。

- サーバーにハードディスクドライブ (Hard Disk Drive、HDD) または半導体ドライブ (Solid State Drive、SSD) が搭載されている。
- HDD または SSD がサーバーに適切に設置されている。詳細な手順については、『サービス』、「ストレージドライブの保守 (CRU)」を参照してください。
- サーバーへのコンソール接続が確立されている。詳細は、[12 ページの「コンソール表示オプションの選択」](#)を参照してください。

1 サーバーをリセットするか、電源を入れます。

例:

- ローカルサーバーの場合、サーバーのフロントパネルにある電源ボタンを押して (約 1 秒) サーバーの電源を切断し、次にもう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を投入します。
- Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
- サーバー SP の Oracle ILOM CLI で、次のように入力します: `reset /System`

BIOS 画面が表示されます。



- 2 BIOS 画面でプロンプトが表示されたら、**F2**を押して **BIOS 設定ユーティリティ**にアクセスします。
しばらくすると、**BIOS 設定ユーティリティ**が表示されます。
- 3 出荷時のデフォルト値に設定するために、次を実行します。
 - a. **F9**を押すと、最適な出荷時のデフォルト設定が自動的に読み込まれます。
メッセージが表示され、「**OK**」を選択してこの操作を続けるか、「**CANCEL**」を選択してこの操作を取り消すよう指示されます。
 - b. メッセージで「**OK**」を強調表示して、**Enter**を押します。
BIOS 設定ユーティリティ画面が表示され、システム時間の欄の最初の値でカーソルが強調表示されます。
- 4 **BIOS 設定ユーティリティ**で次の手順を実行して、メニュー項目に関連する値を編集します。
 - a. 変更する値を強調表示します。
上下の矢印キーを使用して、メニュー項目を選択します。
 - b. 強調表示された欄の値を変更するには、次のキーを使用します。
 - プラス(+)を押すと、表示されている現在の値が増加します
 - マイナス(-)を使用すると、現在表示されている値が減少します
 - **Enter**キーを使用すると、選択した項目の値を示すポップアップメニューが表示されます

- 5 ブート設定にアクセスするには、「**Boot**」メニューを選択します。
「**Boot**」メニューが表示されます。
- 6 「**Boot Settings**」メニューで、下矢印キーを使用して「**Boot Device Priority**」を選択し、**Enter**を押します。
「**Boot Device Priority**」メニューが表示され、認識されているブートデバイスの優先順位が示されます。リストの先頭のデバイスが、ブートの優先度がもっとも高いデバイスです。
- 7 「**Boot Device Priority**」メニューで次の手順を実行して、リストの最初のブートデバイスエントリを編集します。
 - a. 上下矢印キーを使用してリストの先頭のデバイスを選択し、**Enter**を押します。
 - b. 「**Options**」メニューで、上下矢印キーを使用してデフォルトの常時ブートデバイスを選択し、**Enter**を押します。

注- 変更する各デバイス項目に対して手順 7a および 7b を繰り返して、リスト内のほかのデバイスのブート順を変更できます。

- 8 変更を保存して **BIOS** 設定ユーティリティーを終了するには、**F10**を押します。
または、「**Save & Exit**」メニューから「**Save and Reset**」を選択して変更を保存し、**BIOS** 設定ユーティリティーを終了することもできます。変更を保存して設定を終了することを確認するメッセージが表示されます。メッセージダイアログで「**OK**」を選択して、**Enter**を押します。

注- Oracle ILOM リモートコンソールを使用している場合、**F10** はローカル OS にトランプされます。このため、リモートコンソールアプリケーションの上部にある「**Keyboard**」ドロップダウンメニューから「**F10**」オプションを使用する必要があります。

▼ レガシー **BIOS** と **UEFI BIOS** モードの切り替え

注- 現在、Oracle Linux 6.1、6.2、および 6.3、Red Hat Enterprise Linux 6.1、6.2、および 6.3、そして SUSE Linux Enterprise Server 11 SP1 および SP2 だけが、**UEFI BIOS** モードをサポートする Linux オペレーティングシステムとしてサポートされています。

BIOS ファームウェアは、レガシー **BIOS** と Unified Extensible Firmware Interface (**UEFI**) の両方をサポートしています。デフォルトの設定はレガシー **BIOS** です。オペ

レーティングシステムによっては、レガシー BIOS と UEFI BIOS の両方をサポートしているものも、レガシー BIOS だけをサポートしているものもあるので、ユーザーには次のオプションがあります。

- インストールするオペレーティングシステムがレガシー BIOS だけをサポートしている場合は、OS のインストールを行なう前に、BIOS がレガシーモードに設定されていることを確認する必要があります。
- インストールするオペレーティングシステムがレガシー BIOS と UEFI BIOS の両方をサポートしている場合は、OS のインストールを実行する前に、レガシーモードと UEFI モードのどちらかに BIOS を設定できます。

注-オペレーティングシステムをインストールしたあとで、レガシー BIOS から UEFI BIOS に、またはその逆に切り替えることにした場合、すべてのパーティションを削除して、オペレーティングシステムを再インストールする必要があります。

1 サーバーをリセットするか、サーバーの電源を投入します。

例:

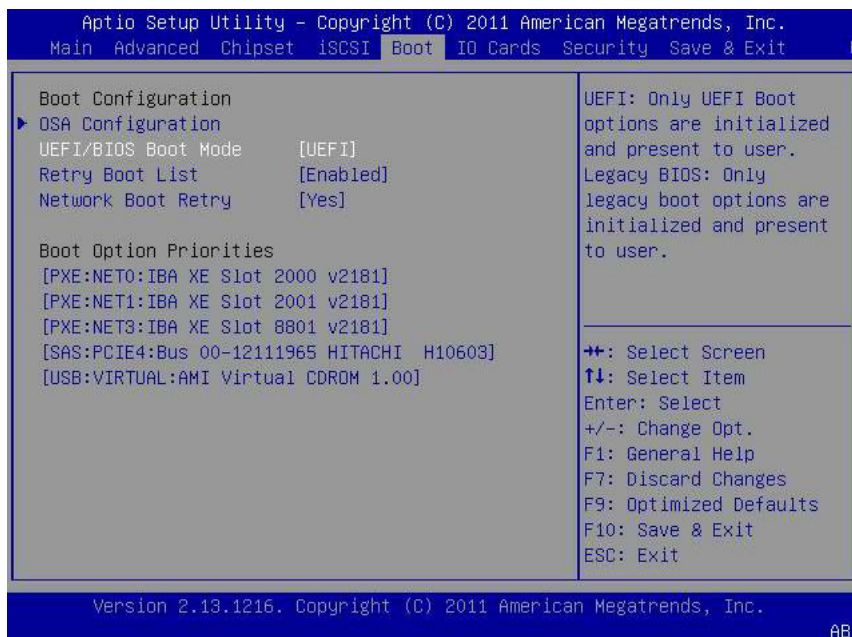
- ローカルサーバーの場合、サーバーのフロントパネルにある電源ボタンを押して(約1秒)サーバーの電源を切断し、次にもう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を投入します。
- **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「**Host Management**」>「**Power Control**」を選択し、「**Select Action**」リストボックスから「**Reset**」を選択します。
- **Oracle ILOM CLI**で、プロンプトから次のコマンドを入力します。

-> **reset /System**

BIOS 画面が表示されます。



- 2 BIOS 画面でプロンプトが表示されたら、**F2**を押して **BIOS 設定ユーティリティ**にアクセスします。
しばらくすると、**BIOS 設定ユーティリティ**が表示されます。
- 3 **BIOS 設定ユーティリティ**で、上部のメニューバーから「**Boot**」を選択します。
「**Boot**」メニュー画面が表示されます。



- 4 「**UEFI/BIOS Boot Mode**」フィールドを選択し、**+/-**キーを使用して、**レガシー BIOS**または**UEFI**の目的のモードに設定を切り替えます。
- 5 変更を保存して **BIOS**を終了するには、**F10**キーを押します。

ネットワーク接続をサポートするための **SLES 11 SP1** オペレーティングシステムソフトウェアの構成

サーバーで使用される 10 ギガビット Ethernet (10GbE) コントローラ (X540)に必要なドライバは、SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 SP1 の一般提供リリースには含まれていません。サーバーの組み込み型 10GbE コントローラを SLES 11 SP1 で使用するには、アップグレード済みの Intel 10GbE ixgbe ドライバを、SUSE Partner Linux Driver Program (PLDP) の Web サイトからダウンロードする必要があります。

注 - SLES 11 SP2 をインストールしている場合、SLES 11 SP2 には必要な ixgbe ドライバが含まれているため、このセクションを無視してもかまいません。

注 - Oracle System Assistant を使用して SLES 11 SP1 オペレーティングシステムをインストールする場合は、このセクションを無視してもかまいません。Oracle System Assistant には、必要なアップグレード済みの Intel 10GbE ixgbe ドライバが含まれており、自動的にインストールされます。

PLDP の詳細については、http://www.novell.com/developer/partner_linux_driver.html を参照してください。

SLES 11 SP1 用の PLDP ドライバをダウンロードするには、http://drivers.suse.com/driver-process/pub/update/Intel/sle11sp1/common/x86_64/ を参照してください。

これを書いている時点では、SLES 11 SP1 用の次の PLDP ixgbe ドライバが入手できません。

- intel-ixgbe-3.7.14.1.x86_64.rpm
- intel-ixgbe-kmp-default-3.7.14.2.6.32.12_0.7-1.x86_64.rpm
- intel-ixgbe-kmp-xen-3.7.14_2.6.32.12_0.7-1.x86_64.rpm

配布 DVD (または ISO DVD イメージ) から SLES 11 SP1 をインストールし構成したあと、または初期インストール中に、適切なドライバの .rpm ファイルをインストールできます。

アップグレード済みの ixgbe ドライバを初期インストール中にインストールする場合は、インストールプロセス中に使用するドライバ更新ディスク (DUD) を作成する必要があります。DUD を作成するための SUSE の手順については、http://www.novell.com/developer/creating_a_driver_update_disk_%28dud%29.html を参照してください。

インストールプロセスの一部として DUD を使用するための SUSE の手順については、次の URL を参照してください。

- http://www.suse.com/documentation/sles11/book_sle_deployment/?page=/documentation/sles11/book_sle_deployment/data/book_sle_deployment.html。
- http://www.suse.com/documentation/sles11/book_sle_deployment/data/sec_i_yast2_bootscreen.html。

アップグレード済みの ixgbe ドライバファイルを PXE 構成に組み込んで、ネットワークインストールを完全に自動化することもできます。更新済みドライバを組み

込む (たとえば、新しいドライバで PXE 読み込み可能な `initrd` ファイルをリビルドするなど) 手順は高度なトピックであり、このドキュメントの適用範囲を超えています。

RAID の構成

RAID 構成でサーバストレージドライブを構成する場合、Linux OS をインストールする前にサーバ上で RAID を構成してください。RAID の構成手順については、『設置』の「RAID の構成」を参照してください。

関連情報

- 『管理』、「RAID の構成」

Linux オペレーティングシステムのインストール

このセクションでは、Oracle Linux、Red Hat Enterprise Linux、および SUSE Linux Enterprise Server オペレーティングシステムとシステム固有のドライバをサーバーにインストールする手順について説明します。

説明	リンク
Oracle System Assistant を使用した Linux オペレーティングシステムのインストール。	31 ページの「Oracle System Assistant を使用した Linux OS の単一システムへのインストール」
メディアを使用した Oracle Linux オペレーティングシステムの単一サーバーへのインストール。	35 ページの「メディアを使用した Oracle Linux の単一システムへのインストール」
メディアを使用した Red Hat Enterprise Linux オペレーティングシステムの単一サーバーへのインストール。	67 ページの「メディアを使用した Red Hat Enterprise Linux の単一システムへのインストール」
メディアを使用した SUSE Linux Enterprise Server オペレーティングシステムの単一サーバーへのインストール。	83 ページの「メディアを使用した SUSE Linux Enterprise Server の単一システムへのインストール」

Oracle System Assistant を使用した Linux OS の単一システムへのインストール

Oracle System Assistant アプリケーションの OS のインストールタスクは、サポートされている OS をサーバーにインストールするための推奨方法です。

- [31 ページの「Oracle System Assistant を使用して Linux OS をインストールする」](#)

▼ Oracle System Assistant を使用して Linux OS をインストールする

始める前に この手順を始める前に、次を実行します。

- 23 ページの「オペレーティングシステムのインストールの準備」の手順を実行します。
- ブートドライブ(つまり、OS をインストールするストレージドライブ)を RAID 用に構成する場合は、Linux OS をインストールする前に構成しておく必要があります。サーバーで RAID を構成する方法については、『設置』、「RAID の構成」を参照してください。

1 インストールメディアがブートに使用できることを確認します。

- ディストリビューション CD/DVD の場合。Linux メディア(番号 1 が付いた CD、または単一の DVD)をローカルまたはリモートの CD/DVD-ROM ドライブに挿入します。
- ISO イメージを使用する場合。ISO イメージが使用可能であり、Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションが最初の ISO イメージの場所を認識していることを確認します。
インストールメディアの設定方法については、14 ページの「ブートメディアオプションの選択」を参照してください。

2 次の 2 つの方法のどちらかで Oracle System Assistant を起動します。

- Oracle ILOM Web インタフェースから、「Summary」>「Launch Oracle System Assistant」をクリックします。

ORACLE Integrated Lights Out Manager

User: root Role: auro SP H

Summary

View system summary information. You may also change power state and view system status and fault information.

General Information	
Model	SUN FIRE X4170 M3
Serial Number	012345678
System Type	Rack Mount
System Identifier	OSA Team Test Nashua
System Firmware Version	ILOM: 3.1.0.0 BIOS: 17010608
Primary Operating System	-
Host Primary MAC Address	-
ILOM Address	10.153.55.202
ILOM MAC Address	00:21:28:D5:C0:CE

Actions	
Power State	<input checked="" type="checkbox"/> ON <input type="checkbox"/> OFF <input type="button" value="Turn Off"/> <input type="button" value="Turn On"/>
Locator Indicator	<input checked="" type="checkbox"/> ON <input type="checkbox"/> OFF <input type="button" value="Turn On"/> <input type="button" value="Turn Off"/>
Oracle System Assistant Version: 1.0.0.0	<input type="button" value="Launch"/>
System Firmware Update	<input type="button" value="Update"/>
Remote Console	<input type="button" value="Launch"/>

Status			
Overall Status:	<input checked="" type="checkbox"/> OK Total Problem Count: 0		
Subsystem	Status	Details	Inventory
Processors	<input checked="" type="checkbox"/> OK	Processor Architecture: x86 64-bit Processor Summary: 2 Intel Xeon Processor E5 Series	Processors (Installed / Maximum):
Memory	<input checked="" type="checkbox"/> OK	Installed RAM Size: 16 GB	DIMMs (Installed / Maximum):
Power	<input checked="" type="checkbox"/> OK	Permitted Power Consumption: 590 watts	PSUs (Installed / Maximum):

- または
- サーバーをリセットするか、サーバーの電源を投入します。

例:

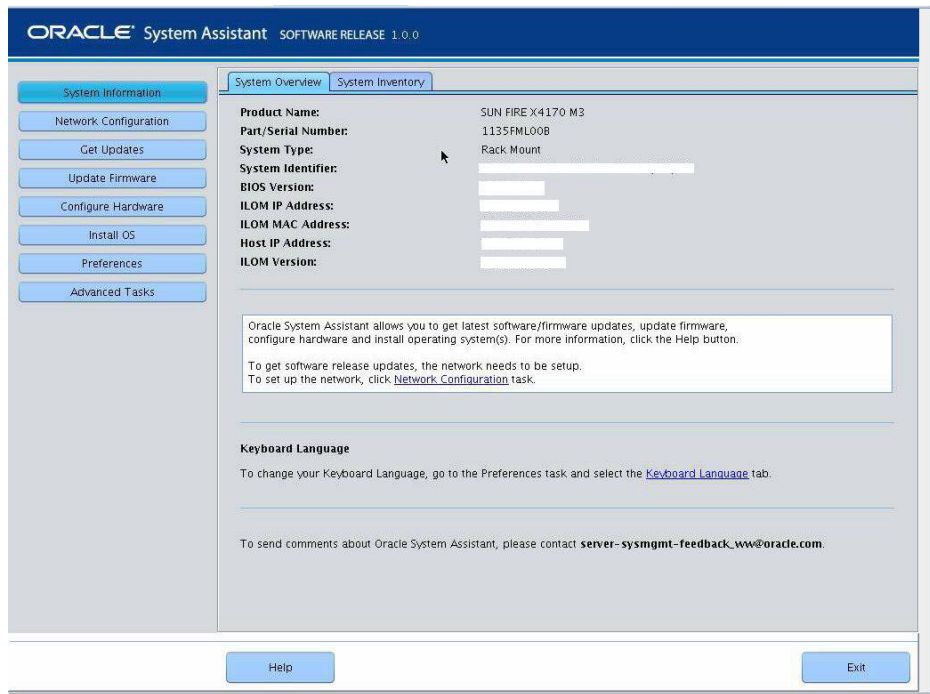
- ローカルサーバーの場合、サーバーのフロントパネルにある電源ボタンを押して (約 1 秒) サーバーの電源を切断し、次にもう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を投入します。
- **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
- **Oracle ILOM CLI** で次のように入力します: **reset /System**
BIOS 画面が表示されます。



注-次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。

3 F9 キーを押します。

「Oracle System Assistant System Overview」画面が表示されます。



4 最新のソフトウェアリリースパッケージに更新するには、Oracle System Assistant の「Get Updates」ボタンをクリックします。

この操作により、OS のインストール開始前に、アプリケーションに最新のソフトウェアリリースパッケージが確実にインストールされます。

注 - Oracle System Assistant を更新するには、サーバーの Web アクセスが必要です。

5 サーバーのファームウェアを更新するには、「Update Firmware」ボタンをクリックします。

この操作により、OS のインストール開始前に、サーバーのファームウェアおよび BIOS が確実に最新のものになります。

6 OS をインストールするには、「Install OS」ボタンをクリックします。

「Operating System Installation」画面が表示されます。

7 「Supported OS」ドロップダウンリストから OS を選択します。

- 8 画面の「**Select a BIOS mode if applicable**」の部分で、**OS** のインストールに使用する BIOS モード (UEFI またはレガシー BIOS) を選択します。
現在、Oracle Linux 6.1、6.2、および 6.3、Red Hat Enterprise Linux 6.1、6.2、および 6.3、そして SUSE Linux Enterprise Server 11 SP1 および SP2 だけが、UEFI BIOS モードをサポートする Linux オペレーティングシステムとしてサポートされています。
- 9 「**Select your install media location**」セクションで、インストールメディアの場所を指定します。
これは OS 配布メディアの場所です。CD/DVD デバイスを選択できます。
Oracle System Assistant は、PXE (Preboot eXecution Environment) インストールをサポートしません。
- 10 「**View Installation Options**」をクリックします。
「Installation Options」ダイアログが表示されます。
- 11 「**Installation Options**」ダイアログで、インストールしない項目を選択解除します。
「Installation Options」ダイアログで、「OS」と「Drivers」のオプションは必須であり、選択解除できません。
- 12 「**Operating System Installation**」画面の最下部にある「**Install OS**」ボタンをクリックします。
- 13 プロンプトに従ってインストールを完了します。
サーバーがブートします。

メディアを使用した **Oracle Linux** の単一システムへのインストール

このセクションでは、Oracle Linux 5.7、5.8、6.1、6.2、および 6.3 for x86 (64 ビット) オペレーティングシステムのインストール方法について説明します。

- 36 ページの「Oracle Linux OS のインストールのタスクマップ」
- 37 ページの「準備作業」
- 38 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用した Oracle Linux 5.7 または 5.8 のインストール」
- 48 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用した Oracle Linux 6.1、6.2、または 6.3 のインストール」
- 64 ページの「PXE ネットワークブートを使用した Oracle Linux 5.7、5.8、6.1、6.2、または 6.3 のインストール」
- 67 ページの「Oracle Linux のインストール後のタスク」

Oracle Linux OS のインストールのタスクマップ

これらの手順では、新規インストールで Oracle Linux OS をインストールする手順について説明します。

手順	説明	リンク
1.	サーバーハードウェアを設置し、Oracle ILOM サービスプロセッサを構成します。	<ul style="list-style-type: none">■ 『設置』、「サーバーのラックへの設置」■ 『設置』、「サーバーの配線」■ 『設置』、「Oracle ILOM への接続」
2.	Oracle Linux インストールメディアを入手します。	インストールメディアは、次の場所でダウンロードまたは注文できます： http://www.oracle.com/us/technologies/linux/index.html
3.	プロダクトノートを確認します。	『Sun Server X3-2 プロダクトノート』： http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=SunServerX3-2
4.	インストールの実行時に使用するコンソール、Oracle Linux メディア、インストール先を設定します。	<ul style="list-style-type: none">■ 12 ページの「コンソール表示オプションの選択」■ 14 ページの「ブートメディアオプションの選択」■ 17 ページの「インストール先オプションの選択」
5.	OS の新規インストール用に BIOS 設定を指定します。	23 ページの「BIOS の設定」
6.	Oracle Linux OS をインストールします。	<ul style="list-style-type: none">■ 38 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用した Oracle Linux 5.7 または 5.8 のインストール」■ 48 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用した Oracle Linux 6.1、6.2、または 6.3 のインストール」■ 64 ページの「PXE ネットワークブートを使用した Oracle Linux 5.7、5.8、6.1、6.2、または 6.3 のインストール」
7.	インストール後のタスクを適宜実行します。	67 ページの「Oracle Linux のインストール後のタスク」

関連情報

- [23 ページの「オペレーティングシステムのインストールの準備」](#)

準備作業

次の要件が満たされていることを確認します。

- インストールの実行前に、コンソール表示オプションが選択および設定されている必要があります。このオプションの詳細については、[12 ページの「コンソール表示オプションの選択」](#)を参照してください。
- ブートメディアオプションは、インストールの実行前に選択および設定するようにしてください。このオプションと設定手順の詳細については、[14 ページの「ブートメディアオプションの選択」](#)を参照してください。
- インストール先オプションは、インストールの実行前に選択および設定するようにしてください。このオプションと設定手順の詳細については、[17 ページの「インストール先オプションの選択」](#)を参照してください。
- BIOS 設定が適切に指定されたことを確認します。BIOS 設定を確認し、必要に応じて設定する手順については、[23 ページの「BIOS の設定」](#)を参照してください。

注 - Oracle Linux 5.7 および 5.8 のインストールの場合、UEFI BIOS は Oracle Linux 5.7 または 5.8 でサポートされていないので、BIOS モードはレガシー BIOS に設定する必要があります。

- ローカルインストールの場合、プロンプトが表示されたときに、接続された物理 CD/DVD-ROM ドライブに挿入できる Oracle Linux インストールメディアを用意します。
- リモートインストールの場合、Oracle ILOM リモートコンソールシステムの CD/DVD-ROM ドライブに Oracle Linux インストールメディアを挿入します。Oracle ILOM リモートコンソールシステムの「Devices」メニューで「CD-ROM」を選択していることを確認します。
- Oracle Linux イメージを使用している場合は、Oracle ILOM リモートコンソールシステムから Oracle Linux ISO イメージにアクセスできることを確認します。Oracle ILOM リモートコンソールシステムの「Devices」メニューで「CD-ROM Image」を選択していることを確認します。

▼ ローカルメディアまたはリモートメディアを使用した **Oracle Linux 5.7** または **5.8** のインストール

この手順では、Oracle Linux オペレーティングシステムをローカルメディアまたはリモートメディアからインストールする方法について説明します。この手順では、次のいずれかのソースから Oracle Linux のインストールメディアをブートすることを前提にしています。

- Oracle Linux 5.7 または 5.8 の CD または DVD セット (内蔵または外付け CD/DVD)
- Oracle Linux 5.7 または 5.8 の ISO DVD イメージ (ネットワークリポジトリ)

注 - Oracle Linux 5.x のインストールの場合、UEFI BIOS は Oracle Linux 5.x でサポートされていないので、BIOS モードはレガシー BIOS に設定する必要があります。

注 - PXE 環境からインストールメディアをブートする場合は、64 ページの「[PXE ネットワークブートを使用した Oracle Linux 5.7、5.8、6.1、6.2、または 6.3 のインストール](#)」で手順を確認してください。

この手順の完了後、この章で後述する、インストール後に必要なタスクを確認して実行する必要があります。詳細は、67 ページの「[Oracle Linux のインストール後のタスク](#)」を参照してください。

1 インストールメディアがブートできることを確認します。

- ディストリビューション CD/DVD の場合。ローカルまたは外付け CD/DVD-ROM ドライブに、**Oracle Linux 5.7** または **5.8** 配布メディアブートディスク (番号 1 が付いた CD、または単一の DVD) を挿入します。
- ISO イメージの場合。ISO イメージが **Oracle Linux 5.7** または **5.8** で使用できると、およびブートディスクイメージ (番号 1 が付いた CD、または DVD) が **Oracle ILOM** リモートコンソールアプリケーションで選択されていること (「**Devices**」メニュー > 「**CD-ROM Image**」) を確認します。

インストールメディアの設定方法については、14 ページの「[ブートメディアオプションの選択](#)」を参照してください。

2 サーバーをリセットするか、サーバーの電源を投入します。

例:

- ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを約 1 秒押してサーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を入れます。
- Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
- サーバー SP の Oracle ILOM CLI で、次のように入力します: `reset /System`

BIOS 画面が表示されます。



注- 次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。

- 3 BIOS 画面で、**F8** キーを押して、**Linux OS** のインストールで使用する一時ブートデバイスを指定します。

「Please Select Boot Device」メニューが表示されます。



注-インストール時に表示されるブートデバイスメニューは、サーバーに取り付けられているディスクコントローラのタイプによって異なる場合があります。

- 4 「Please Select Boot Device」メニューで、使用対象として選択した **Linux** メディアのインストール方法と BIOS モードに応じたメニュー項目を選択し、**Enter** キーを押します。

例:

- **Linux OS** のローカル配布方法を使用することを選択した場合、画面から **SATA:HDD:P4 DV-W28SS-V** を選択します。
- **Oracle ILOM** リモートコンソール配布方法を使用することを選択した場合は、画面から **USB:VIRTUAL:AMI VIRTUAL CDROM 1.00** を選択します。

Oracle Linux 5.x のインストール画面が表示されます。

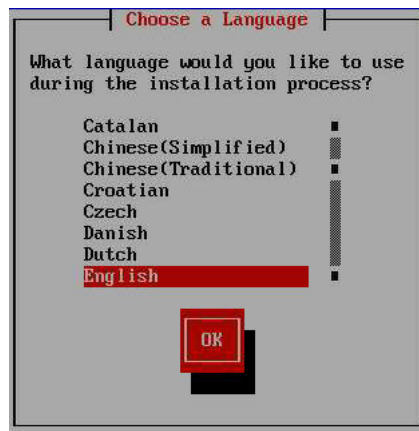


- 5 Oracle Linux 5.x のインストール画面で、Enter キーを押して標準的な対話式インストールを続けます。

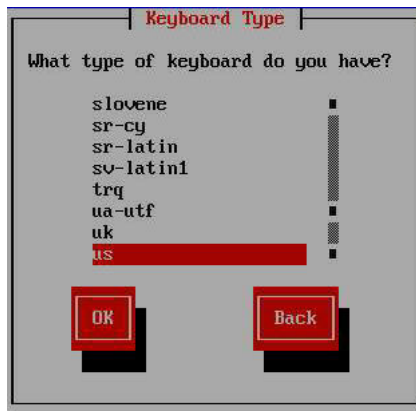
または、テキストモードで、次のコマンドを入力します。

boot: **linux text**

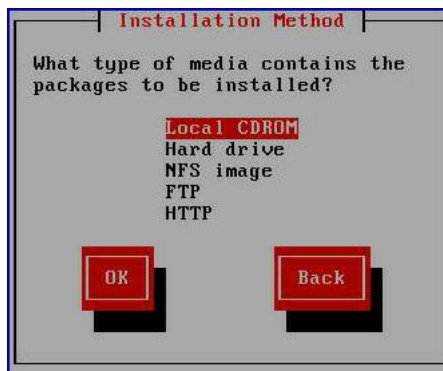
言語の画面が表示されます。



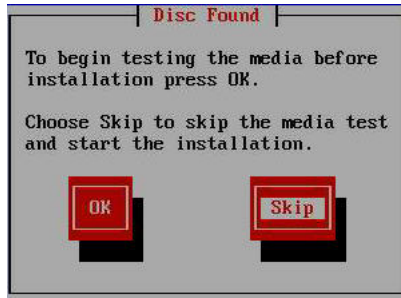
- 6 「Choose a Language」画面で、適切な言語を選択して「OK」をクリックします。
「Keyboard Type」画面が表示されます。



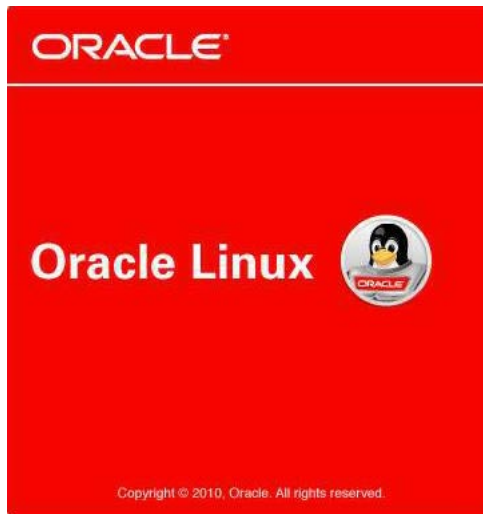
- 7 「キーボードタイプ」画面で、適切なキーボード構成を選択してから、「OK」をクリックします。
「Installation Method」画面が表示されます。



- 8 「Installation Method」画面で、適切なインストール方法(「Local CDROM」または「NFS image」)を選択し、「OK」をクリックします。
「Disc Found」画面が表示されます。



- 9 今回はじめて、このメディアからインストールを実行している場合は、「OK」をクリックしてメディアをテストすることをお勧めします。それ以外の場合は、「skip」をクリックします。
Oracle Linux 5 のスプラッシュ画面が表示されます。



- 10 Oracle Linux 5 のスプラッシュ画面の最下部で、「Next」をクリックします。
インストール先のディスクにデータ形式の問題がある場合は、パーティション分割エラーに関する警告が表示されます。



これがインストールに使用するストレージドライブである場合は、ドライブを再フォーマットする必要があります。それ以外の場合は、この警告を無視してかまいません。

注- サーバーの出荷時に装備されていたストレージドライブは新しいもののので、フォーマットされていません。フォーマットされていないディスクにインストールすると、このエラーが表示されます。

ディスクを再フォーマットするには、「Yes」をクリックします。

それ以外の場合は、「Installation Number」ダイアログが表示されます。

- 11 「Installation Number」ダイアログで、「インストール番号」を入力するか、「Skip entering installation number」をクリックし、「OK」をクリックします。
「Disk Partition Setup」画面が表示されます。

12 「Disk Partition Setup」画面で、次の手順に従います。

- a. 「Remove Linux partition on selected drives and create default layout」のオプションを選択するか、Disk Druidの「Create custom layout」オプションを使用して手動でディスクをパーティションに分割し、「Next」をクリックします。



- b. Oracle Linuxのディスクパーティション分割画面に表示される手順を参照して、必要に応じてディスクをパーティションに分割します。

注 - Oracle Solaris OS または Oracle VM がディスクにインストール済みの場合は、ディスクをパーティションに分割してインストール済みの OS を削除するか、インストール済みの OS を削除せずにディスクをパーティションに分割し、デュアルブートオペレーティングシステムをサポートすることもできます。

13 画面上の指示に従って、Oracle Linux インストールの基本設定を続行します。

- 14 インストールの完了後、サーバーをリブートします。
BIOS 画面が表示されます。

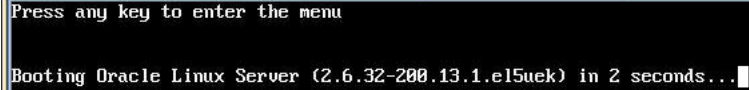


- 15 BIOS 設定ユーティリティを実行するには、F2 キーを押します。
BIOS 設定ユーティリティが表示されます。



- 16 「Boot」メニューを選択します。
新規インストールした OS をデフォルトのブートにするには、インストール先のストレージドライブをブート優先順位リストの最上位に移動して、F10 キーを押します。

- 17 リブートが続行されると、カーネル画面が表示されます。



```
Press any key to enter the menu

Booting Oracle Linux Server (2.6.32-200.13.1.el5uek) in 2 seconds...
```

Oracle Unbreakable Enterprise Kernelがデフォルトのカーネルになっていることに注意してください。

- 18 デフォルトのカーネルを変更しない場合は、[手順 20](#)に進みます。
- 19 (オプション) Red Hat と互換性のあるカーネルに切り替える場合は、次を実行します。

- a. いずれかのキーを押します。

GNU GRUB のカーネル選択画面が表示されます。



```
GNU GRUB version 0.97 (630K lower / 2055120K upper memory)

Oracle Linux Server (2.6.32-200.13.1.el5uek)
Oracle Linux Server-base (2.6.18-274.el5)

Use the ↑ and ↓ keys to select which entry is highlighted.
Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the
commands before booting, 'a' to modify the kernel arguments
before booting, or 'c' for a command-line.
```

- b. Red Hat と互換性のあるカーネルの場合は、2 番目のメニューオプションを選択し、Enter キーを押します。
- 20 Oracle Linux のインストールを完了し、目的の Linux カーネルでサーバーをリブートしたあと、[67 ページの「Oracle Linux のインストール後のタスク」](#)の説明に従って、インストール後のタスクを実行します。

▼ ローカルメディアまたはリモートメディアを使用した **Oracle Linux 6.1、6.2、または 6.3** のインストール

この手順では、Oracle Linux オペレーティングシステムをローカルメディアまたはリモートメディアからインストールする方法について説明します。この手順では、次のいずれかのソースから Oracle Linux のインストールメディアをブートすることを前提にしています。

- Oracle Linux 6.1、6.2、または 6.3 の CD または DVD セット (内蔵または外付け CD/DVD)
- Oracle Linux 6.1、6.2、または 6.3 の ISO DVD イメージ (ネットワークリポジトリ)

注 - PXE 環境からインストールメディアをブートする場合は、[64 ページの「PXE ネットワークブートを使用した Oracle Linux 5.7、5.8、6.1、6.2、または 6.3 のインストール」](#) で手順を確認してください。

1 インストールメディアがブートできることを確認します。

- ディストリビューション **CD/DVD** の場合。ローカルまたはリモート **CD/DVD-ROM** ドライブに、**Oracle Linux 6.1、6.2、または 6.3** 配布メディアブートディスク (番号 1 が付いた **CD**、または単一の **DVD**) を挿入します。
- **ISO** イメージの場合。**ISO** イメージが **Oracle Linux 6.1、6.2、または 6.3** で使用できること、およびブートディスクイメージ (番号 1 が付いた **CD**、または **DVD**) が **Oracle ILOM** リモートコンソールアプリケーションで選択されていること (「**Devices**」メニュー > 「**CD-ROM Image**」) を確認します。

インストールメディアの設定方法については、[14 ページの「ブートメディアオプションの選択」](#) を参照してください。

2 サーバーをリセットするか、サーバーの電源を投入します。

例:

- ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを約 1 秒押してサーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を入れます。
- **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「**Host Management**」 > 「**Power Control**」を選択し、「**Select Action**」リストボックスから「**Reset**」を選択します。
- サーバー **SP** の **Oracle ILOM CLI** で、次のように入力します: **reset /System**

BIOS 画面が表示されます。

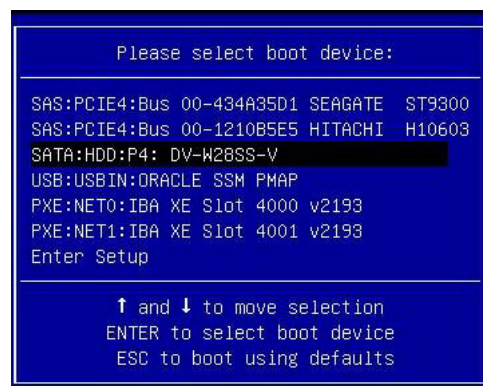


注- 次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。

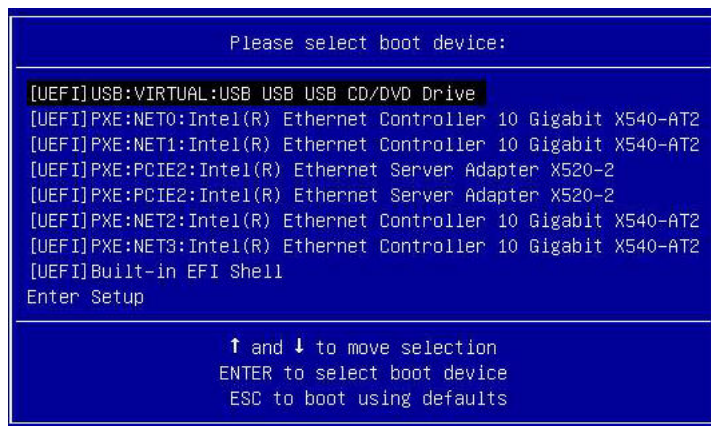
- 3 BIOS 画面で、**F8** キーを押して、**Linux OS** のインストールで使用する一時ブートデバイスを指定します。

「Please Select Boot Device」メニューが表示されます。表示される画面は、BIOS をレガシー BIOS モードに構成したか UEFI モードに構成したかに応じて異なります。

- レガシー BIOS の場合、次の画面が表示されます。



- UEFI BIOS の場合、次の画面が表示されます。



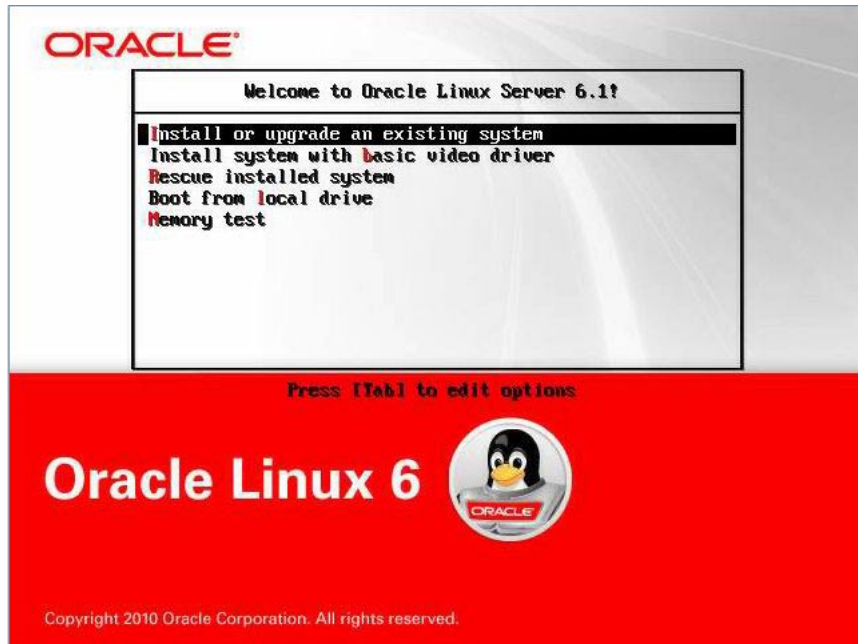
注-インストール時に表示されるブートデバイスメニューは、サーバーに取り付けられているディスクコントローラのタイプによって異なる場合があります。

- 4 「Please Select Boot Device」メニューで、使用対象として選択した **Linux OS** メディアのインストール方法と **BIOS** モードに応じたメニュー項目を選択し、**Enter** キーを押します。

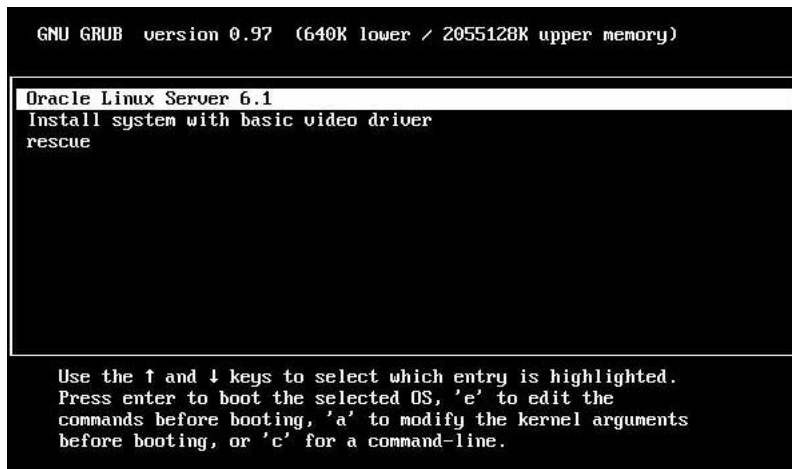
例:

- レガシー **BIOS** モードで **Linux OS** ローカルコンソール配布方法を使用することを選択した場合、レガシー **BIOS** 画面から **SATA:HDD:P4 DV-W28SS-V** を選択します。
- **UEFI BIOS** モードで **Oracle ILOM** リモートコンソール配布方法を使用することを選択した場合は、**UEFI BIOS** 画面から **[UEFI]USB:VIRTUAL:USB USB CD/DVD Drive** を選択します。

レガシー BIOS の場合、Oracle Linux 6.x の「Welcome」画面が表示されます。

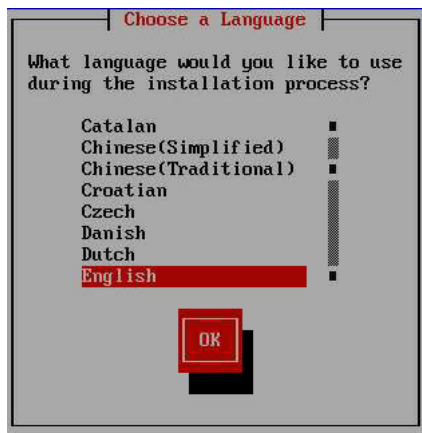


UEFI BIOS の場合、Oracle Linux 6.x GNU GRUB が表示されます。

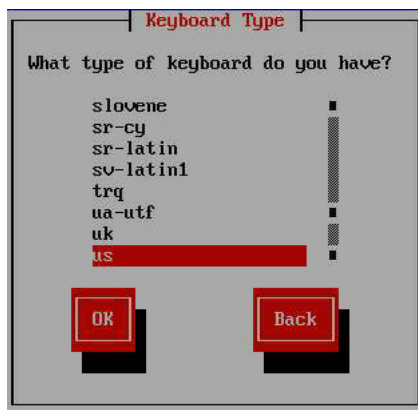


注 - Oracle Linux 6.2 および 6.3 の場合、画面は同様です。

- 5 選択した BIOS モードに応じて、次のいずれかを実行します。
- レガシー BIOS モードからインストールするには、Oracle Linux 6.x の「Welcome」画面で「Install or Upgrade an Existing System」を選択し、画面の最下部にある「Next」をクリックし、画面上に表示されるプロンプトに従って対話式インストールを完了します。
 - UEFI BIOS モードで Linux オペレーティングシステムをインストールするには、GNU GRUB 画面から Oracle Linux Server 6.x を選択し、Enter キーを押します。
「Choose a Language」画面が表示されます。

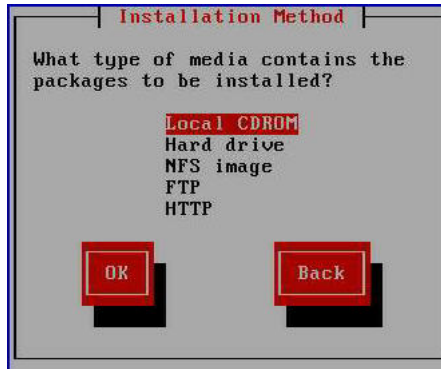


- 6 「Choose a Language」画面で、適切な言語を選択して「OK」をクリックします。
「Keyboard Type」画面が表示されます。



- 7 「キーボードタイプ」画面で、適切なキーボード構成を選択してから、「OK」をクリックします。

「Installation Method」画面が表示されます。



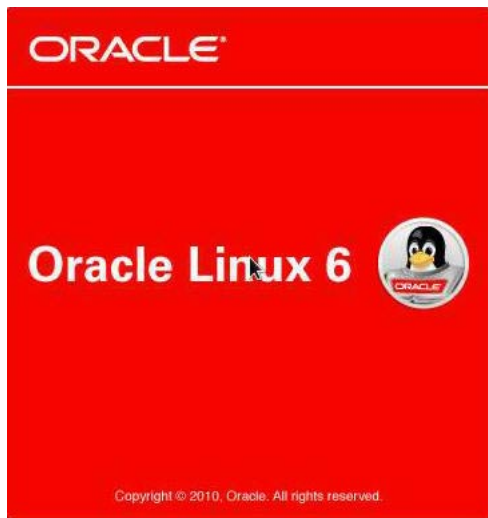
- 8 「Installation Method」画面で、適切なインストール方法(「Local CDROM」または「NFS image」)を選択し、「OK」をクリックします。

「Disc Found」画面が表示されます。

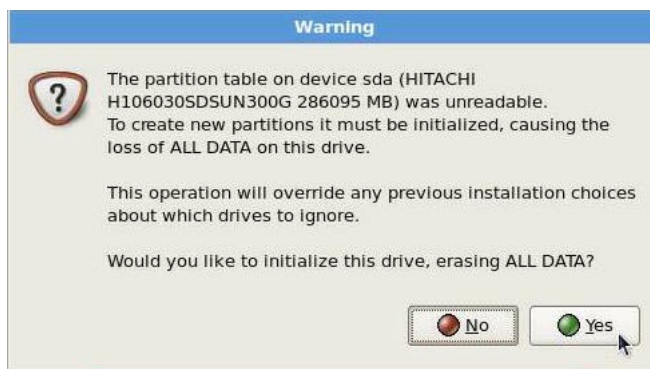


- 9 今回はじめて、このメディアからインストールを実行している場合は、「OK」をクリックしてメディアをテストすることをお勧めします。それ以外の場合は、「Skip」をクリックします。

Oracle Linux 6 のスプラッシュ画面が表示されます。



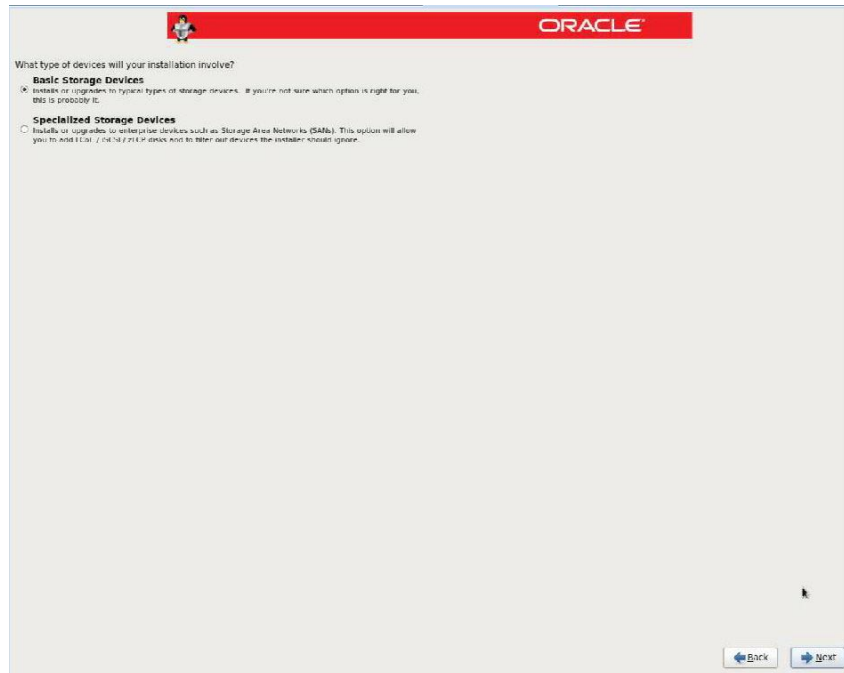
- 10 Oracle Linux 6 のスプラッシュ画面の最下部で、「Next」をクリックします。
いずれかのターゲットディスクにデータ形式の問題がある場合は、パーティション分割エラーの警告が表示されます。



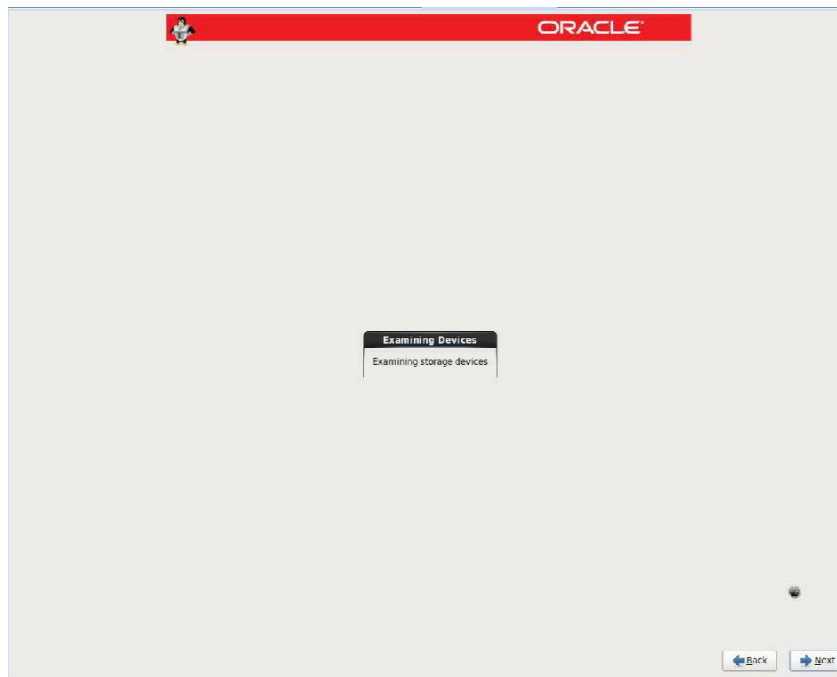
これがインストールに使用するストレージドライブである場合は、ドライブを再フォーマットする必要があります。それ以外の場合は、この警告を無視してかまいません。

ディスクを再フォーマットするには、「Yes」をクリックします。

それ以外の場合は、「Installation Devices」画面が表示されます。

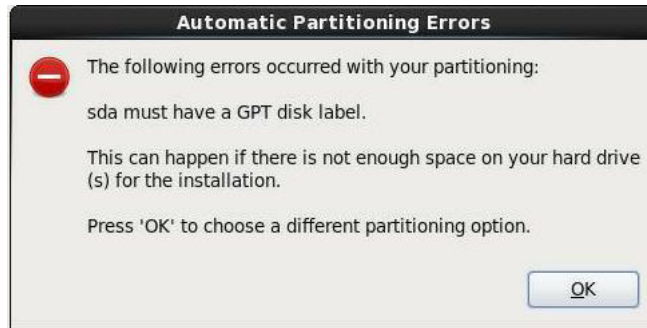


- 11 「Installation Devices」画面で、「Basic Storage Devices」を選択して、「Next」をクリックします。
「Examining Devices」画面が表示されます。



- 12 「Examining Devices」画面で、「Next」をクリックします。
- 13 画面上に表示されるプロンプトに従って、次の手順を実行します。
 - a. ホスト名を入力します。
 - b. (オプション)ネットワークを構成します。
 - c. タイムゾーンを選択します。
 - d. rootパスワードを選択します。
 - e. ディスクパーティション分割とレイアウトを選択します。

- 14 インストール先のディスクにデータ形式の問題がある場合は、「Automatic Partitioning Errors」画面が表示されます。



上の画面が表示された場合は、Linux OS をインストールしようとしているディスクが間違っってフォーマットされており、このディスクを再フォーマットする必要があります。

注- このエラーは、以前レガシー BIOS フォーマットでデータを保存するのに使用していたストレージドライブに、UEFI BIOS OS インストールを実行しようとした場合、またはその逆の場合に発生します。UEFI は GUID パーティションテーブル (GPT) フォーマットを使用しますが、レガシー BIOS はストレージドライブをマスターブートレコード (MBR) フォーマットでフォーマットします。サーバーの出荷時に装備されていたストレージドライブは新しいものなので、フォーマットされていません。フォーマットされていないディスクにインストールする場合には、このエラーは表示されません。

インストールを中止せずにディスクを回復して再フォーマットするには、インストール画面でキーボードの「戻る」ボタンを数回クリックし、[手順9](#)に示す最初のスプラッシュ画面に戻って、これらの手順を実行します。

- a. 復旧シェルを開始するには、**Ctrl/Alt/F2** と入力します。

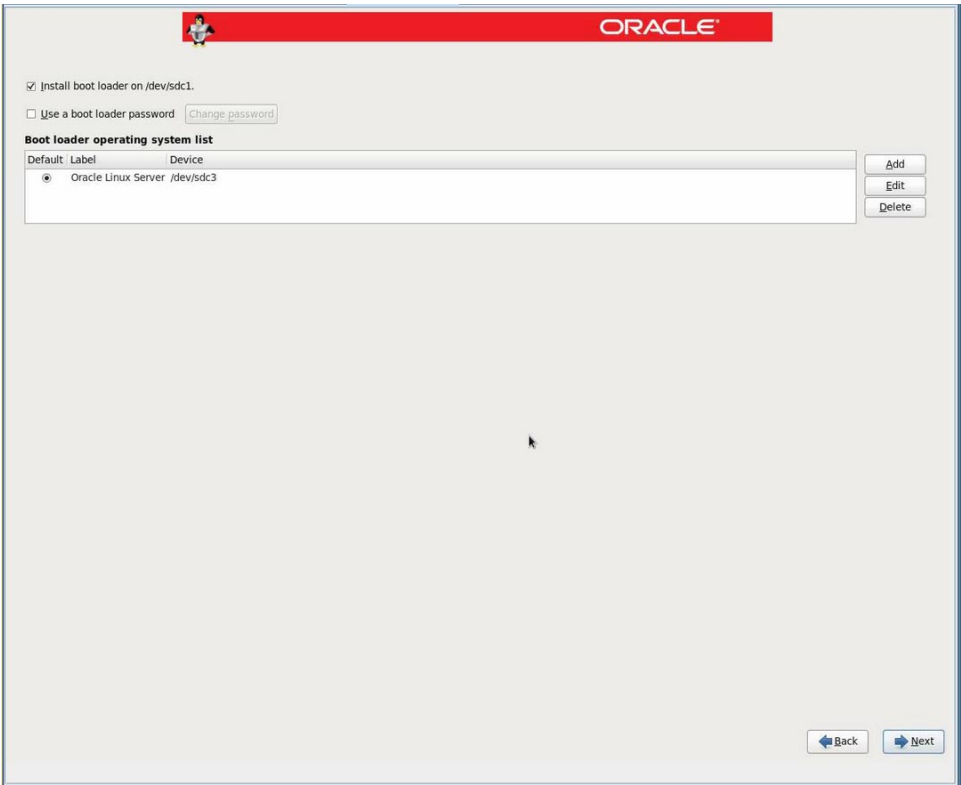
シェルが表示されます。

- b. このインストールの必要に応じて **GPT** 形式または **MBR** 形式でディスクを再フォーマットするには、次の画面に示すようにシェルコマンドを入力します。

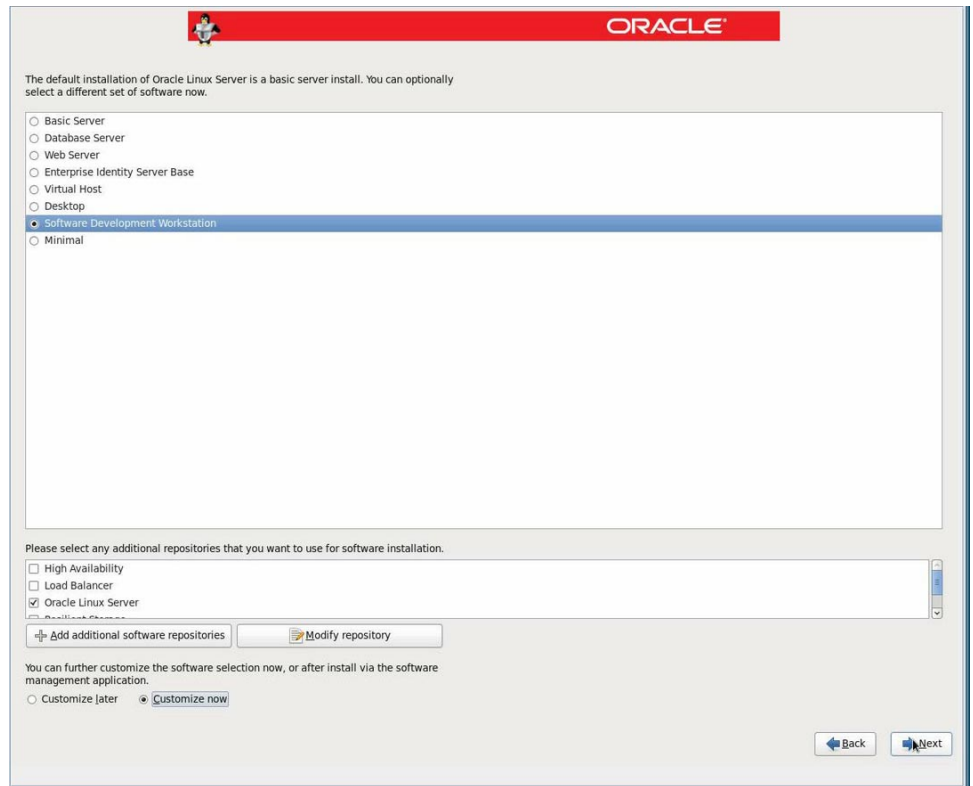
```
anaconda root@localhost [/]# parted /dev/sdc
GNU Parted 2.1
Using /dev/sdc
Welcome to GNU Parted! Type 'help' to view a list of commands.
(parted) p
Model: HITACHI H106030SDSUN300G (scsi)
Disk /dev/sdc: 300GB
Sector size (logical/physical): 512B/512B
Partition Table: msdos
Number  Start   End     Size    Type    File system  Flags
```

```
1      1049kB  21.5GB  21.5GB  primary ext2
(parted) mklabel
New disk label type? gpt
Warning: The existing disk label on /dev/sdc will be destroyed and all data will be lost.
Do you want to continue?
Yes/No? yes
(parted) p
Model: HITACHI H106030SDSUN300G (scsi)
Disk /dev/sdc: 300GB
Sector size (logical/physical): 512B/512B
Partition Table: gpt
Number  Start  End  Size  File system  Name  Flags
(parted) g
Information: You may need to update /etc/fstab.
anaconda root@localhost /]#
```

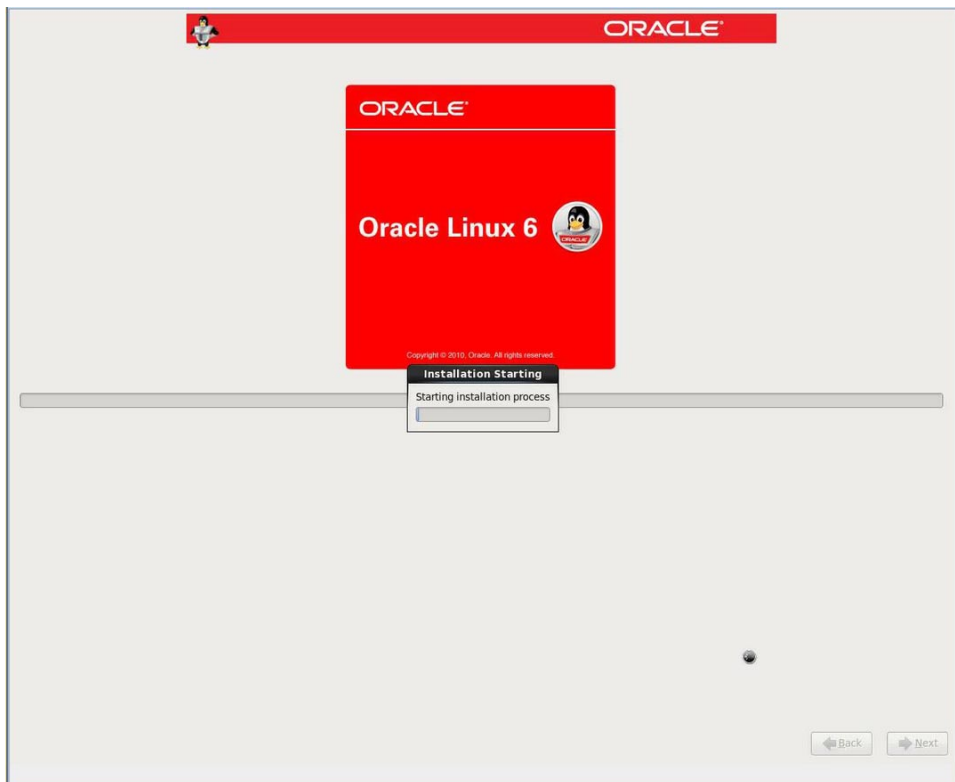
- c. **Ctrl/Alt/F6** と入力して、グラフィカルインストール画面に戻り、**Oracle Linux** スプラッシュ画面の時点からインストールを続行します (手順 10 に移動します)。
- それ以外の場合は、「Bootloader」画面が表示されます。



- 15 「Bootloader」画面で、「Next」をクリックします。
「Select Software」画面が表示されます。



- 16 目的のソフトウェアを選択し、「Next」をクリックします。
「Starting the Installation Process」画面が表示されます。

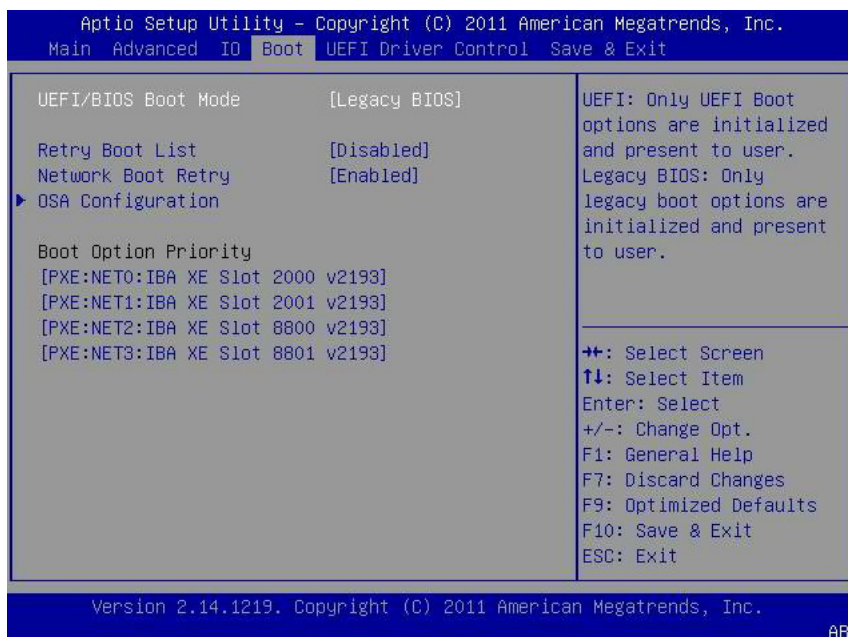


インストールのユーザー対話が完了しました。

- 17 インストールの完了後、サーバーをリブートします。
BIOS画面が表示されます。



- 18 BIOS 設定ユーティリティを実行するには、F2 キーを押します。
レガシー BIOS の場合、次の BIOS 設定ユーティリティが表示されます。



UEFI BIOS の場合、次の BIOS 設定ユーティリティーが表示されます。



- 19 新しくインストールした OS をデフォルトブートにするには、次のいずれかを実行します。
 - レガシー BIOS の場合:
 - 上部のメニューバーで「Boot」を選択し、「Boot Option Priority」フィールドの下で、インストール先のストレージドライブが一番上になっていることを確認します。
 - インストール先ストレージドライブがリストの一番上になっていない場合は、一番上に移動し、F10 キーを押して変更を保存して、BIOS 設定ユーティリティーを終了します。
 - UEFI BIOS の場合:
 - 上部のメニューバーで「Boot」を選択し、「Boot Option Priority」フィールドの下で、Oracle Linux Server が一番上になっていることを確認します。
 - Oracle Linux Server がリストの一番上になっていない場合は、一番上に移動し、F10 キーを押して変更を保存し、BIOS 設定ユーティリティーを終了します。
- 20 リブートが続行されると、次のカーネル画面のいずれかが表示されます。
 - Oracle Linux 6.1 の場合、次の画面が表示されます。

Press any key to enter the menu
Booting Oracle Linux Server (2.6.32.100.34.1.el6uek.x86_64) in 2 seconds...

- Oracle Linux 6.2 の場合、次の画面が表示されます。

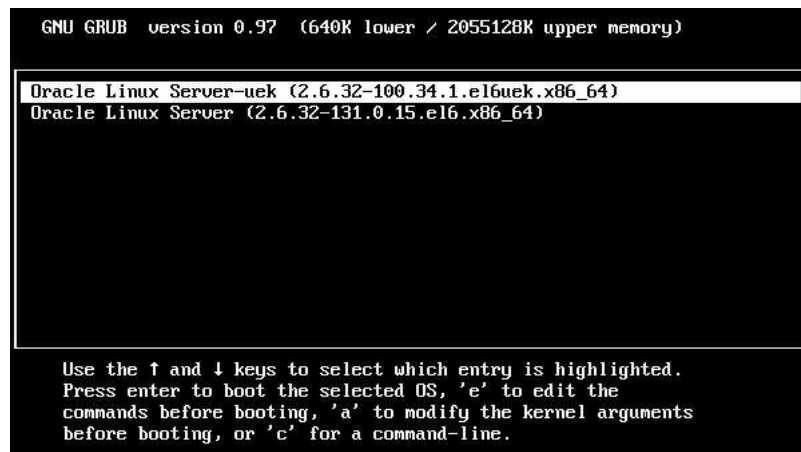
Press any key to enter the menu
Booting Oracle Linux Server (2.6.32.300.3.1.el6uek.x86_64) in 2 seconds...

- Oracle Linux 6.3 の場合、次の画面が表示されます。

Press any key to enter the menu
Booting Oracle Linux Server (2.6.39-200.6.1.el6uek.x86_64) in 2 seconds...

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel はデフォルトのカーネルです。

- 21 デフォルトのカーネルを変更しない場合は、[手順 23](#)に進みます。
- 22 (オプション) Red Hat と互換性のあるカーネルに切り替える場合は、次を実行します。
 - a. いずれかのキーを押します。
GNU GRUB 画面が表示されます。



注 - 上の GRUB 画面には Oracle Linux 6.1 のデフォルトのカーネルが表示されています。Oracle Linux 6.2 の GRUB 画面には、デフォルトのカーネルが 2.6.32.300.3.1.el6uek.x86_64 と表示されます。Oracle Linux 6.3 の GRUB 画面には、デフォルトのカーネルが、Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux である 2.6.39.200.6.1.el6uek.x86_64 と表示されます。

- b. 2 番目のメニューオプションを選択し、**Enter** キーを押します。

- 23 Oracle Linux のインストールを完了し、目的の Linux カーネルでサーバーをリブートしたあと、67 ページの「Oracle Linux のインストール後のタスク」に進みます。

▼ PXE ネットワークブートを使用した Oracle Linux 5.7、5.8、6.1、6.2、または 6.3 のインストール

このセクションでは、PXE ネットワーク環境から Oracle Linux 5.7、5.8、6.1、6.2、または 6.3 をインストールする方法について説明します。この手順では、次のいずれかのソースからインストールメディアをブートすることを前提にしています。

- Oracle Linux 5.7、5.8、6.1、6.2、または 6.3 の ISO DVD イメージまたは KickStart イメージ(ネットワークリポジトリ)

注 - KickStart は自動インストールツールです。これによりシステム管理者は、通常は一般的な Oracle Linux のインストール中に入力される、インストールと構成のパラメータの一部またはすべての設定を含めた、単一のイメージを作成できます。通常、KickStart イメージは 1 つのネットワークサーバー上に配置され、インストール時に複数のシステムによって読み取られます。

始める前に Oracle Linux PXE インストールを実行する前に、次の要件を満たす必要があります。

- KickStart イメージを使用してインストールを行う場合、次の操作が必要です。
 - KickStart ファイルを作成します。
 - KickStart ファイルを含むブートメディアを作成するか、またはネットワーク上で KickStart ファイルを使用できるようにします。
- PXE を使用してネットワーク経由でインストールメディアをブートするには、次の操作が必要です：
 - インストールツリーをエクスポートするようにネットワーク (NFS、FTP、HTTP) サーバーを構成します。
 - PXE のブートに必要なファイルを TFTP サーバー上に構成します。
 - PXE 構成からブートするように、サーバーの MAC ネットワークポートアドレスを構成します。
 - DHCP (動的ホスト構成プロトコル) を構成します。

次の Web サイトにある『Red Hat Enterprise Linux 5.7: System Administration Guide』の PXE ネットワークインストール手順に従ってください：

<http://www.redhat.com/docs>

- 1 PXE ネットワーク環境が正しく設定され、Oracle Linux のインストールメディアを PXE ブートで使用できることを確認します。

2 サーバーをリセットするか、サーバーの電源を投入します。

例:

- ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを約 1 秒押してサーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を入れます。
- **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「**Host Management**」>「**Power Control**」を選択し、「**Select Action**」リストボックスから「**Reset**」を選択します。
- サーバー SP の **Oracle ILOM CLI** で、次のように入力します: **reset /System**

BIOS 画面が表示されます。

注- 次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。



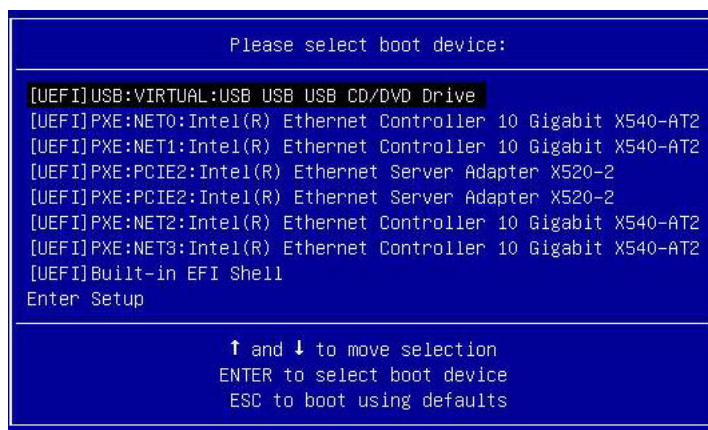
3 BIOS 画面で、F8 キーを押して、Linux OS のインストールで使用する一時ブートデバイスを指定します。

「Please Select Boot Device」メニューが表示され、使用可能なブートデバイスが一覧表示されます。表示される画面は、BIOS をレガシー BIOS モードに構成したか UEFI モードに構成したかに応じて異なります。

- レガシー BIOS の場合、次の画面が表示されます。



- UEFI BIOS の場合、次の画面が表示されます。



注-インストール時に表示されるブートデバイスメニューは、サーバーに取り付けられているディスクコントローラのタイプによって異なる場合があります。

- 4 「**Boot Device**」メニューで、**PXE** ネットワークインストールサーバーと通信するように構成されたネットワークポートを選択します。
ネットワークブートローダーが読み込まれ、起動します。
- 5 ここから先は、インストール手順はサイトの **KickStart** ファイルでの指定に従い、サイト固有になります。

Oracle Linux のインストール後のタスク

Oracle Linux のインストールを完了したら、次に示すインストール後のタスクを確認し、システムで該当するタスクを必要に応じて実行するようにしてください。

- 67 ページの「Oracle Linux の登録と自動更新の有効化」
- 67 ページの「Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux のインストール」

Oracle Linux の登録と自動更新の有効化

Oracle Linux をインストールしたあと、システムを Oracle に登録してサブスクリプションをアクティブ化し、ソフトウェアの自動更新を受信するようにしてください。詳細は、次の Oracle Linux サポートサイトにアクセスしてください。

<http://www.oracle.com/us/technologies/linux/index.html>

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux のインストール

Oracle Linux OS をインストールしたあとで、Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux に更新することもできます。このカーネルをインストールする前に、Oracle Linux 5.8 または 6.2 をサーバーにインストールしている必要があります。

注 - Oracle Linux 6.3 は、デフォルトで Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 をインストールします。

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 のインストール手順については、次の場所にある Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 のスタートガイドを参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/articles/servers-storage-admin/uek-rel2-getting-started-1555632.html>

メディアを使用した Red Hat Enterprise Linux の単一システムへのインストール

このセクションでは、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 5.7、5.8、6.1、6.2、および 6.3 for x86 (64 ビット) と Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 1 for Linux をインストールする手順について説明します。

ここでは、次のトピックを取り上げます。

- 68 ページの「RHEL のインストールのタスクマップ」
- 69 ページの「準備作業」
- 70 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して RHEL 5.7 または 5.8 をインストールする」
- 73 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用した RHEL 6.1、6.2、または 6.3 のインストール」
- 76 ページの「PXE ネットワークブートを使用した RHEL 5.7、5.8、6.1、6.2、または 6.3 のインストール」
- 80 ページの「RHEL のインストール後のタスク」

RHEL のインストールのタスクマップ

これらの手順では、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) オペレーティングシステムのインストール手順について説明します。

手順	説明	リンク
1.	サーバーハードウェアを設置し、Oracle ILOM サービスプロセッサを構成します。	<ul style="list-style-type: none">■ 『設置』、「サーバーのラックへの設置」■ 『設置』、「サーバーの配線」■ 『設置』、「Oracle ILOM への接続」
2.	RHEL インストールメディアを入手します。	次を参照してください: http://rhn.redhat.com
4.	『プロダクトノート』を確認します。	『Sun Server X3-2 プロダクトノート』: http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=SunServerX3-2
5.	インストールの実行に使用するコンソール、RHEL メディア、およびインストール先を設定します。	<ul style="list-style-type: none">■ 12 ページの「コンソール表示オプションの選択」■ 14 ページの「ブートメディアオプションの選択」■ 17 ページの「インストール先オプションの選択」
6.	OS の新規インストール用に BIOS 設定を指定します。	23 ページの「BIOS の設定」

手順	説明	リンク
7.	RHEL OS をインストールします。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 70 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して RHEL 5.7 または 5.8 をインストールする」 ■ 73 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用した RHEL 6.1、6.2、または 6.3 のインストール」 ■ 76 ページの「PXE ネットワークブートを使用した RHEL 5.7、5.8、6.1、6.2、または 6.3 のインストール」
8.	インストール後のタスクを適宜実行します。	80 ページの「RHEL のインストール後のタスク」
9.	(オプション) Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux をインストールします。	80 ページの「(オプション) ローカルまたはリモートコンソールを使用して RHEL に Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux をインストールする」

準備作業

次の要件が満たされていることを確認します。

- インストールの実行前に、コンソール表示オプションが選択および設定されている必要があります。このオプションと設定手順の詳細については、[12 ページの「コンソール表示オプションの選択」](#)を参照してください。
- ブートメディアオプションは、インストールの実行前に選択および設定するようにしてください。このオプションと設定手順の詳細については、[14 ページの「ブートメディアオプションの選択」](#)を参照してください。
- インストール先オプションは、インストールの実行前に選択および設定するようにしてください。このオプションと設定手順の詳細については、[17 ページの「インストール先オプションの選択」](#)を参照してください。
- BIOS 設定が適切に指定されたことを確認します。BIOS 設定を確認し、必要に応じて設定する手順については、[23 ページの「BIOS の設定」](#)を参照してください。
- ローカルインストールの場合、プロンプトが表示されたときに、接続された物理 CD/DVD-ROM ドライブに挿入できる Red Hat Enterprise Linux インストールメディアを用意します。
- リモートインストールの場合、Oracle ILOM リモートコンソールシステムの CD/DVD-ROM ドライブに Red Hat Enterprise Linux インストールメディアを挿入します。Oracle ILOM リモートコンソールシステムの「Devices」メニューから、CD-ROM を選択していることを確認してください。

- Red Hat Enterprise Linux イメージを使用している場合は、Oracle ILOM リモートコンソールシステムから Red Hat Enterprise Linux ISO イメージにアクセスできることを確認します。また、Oracle ILOM リモートコンソールシステムの「Devices」メニューから、CD-ROM イメージを選択していることを確認してください。
- オペレーティングシステムをインストールするための該当するインストール前提条件をすべて満たしているべきです。これらの前提条件については、[23 ページ](#)の「オペレーティングシステムのインストールの準備」を参照してください。

▼ ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して **RHEL 5.7** または **5.8** をインストールする

この手順では、ローカルメディアまたはリモートメディアから Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 5.7 および 5.8 オペレーティングシステムをインストールする方法について説明します。この手順では、次のいずれかのソースから Oracle Linux のインストールメディアをブートすることを前提にしています。

- RHEL 5.7 または 5.8 の CD または DVD セット (内蔵または外付け CD/DVD)
- RHEL 5.7 または 5.8 の ISO DVD イメージ (ネットワークリポジトリ)

注 - RHEL 5.7 および 5.8 のインストールの場合、UEFI BIOS は RHEL 5.7 および 5.8 でサポートされていないので、BIOS モードはレガシー BIOS に設定する必要があります。

注 - PXE 環境からインストールメディアをブートする場合は、[76 ページ](#)の「PXE ネットワークブートを使用した RHEL 5.7、5.8、6.1、6.2、または 6.3 のインストール」で手順を確認してください。

1 インストールメディアがブートできることを確認します。

- ディストリビューション CD/DVD の場合。ローカルまたは外付け CD/DVD-ROM ドライブに、RHEL 5.7 または 5.8 配布メディアブートディスク (番号 1 が付いた CD、または単一の DVD) を挿入します。
- ISO イメージの場合。ISO イメージが RHEL 5.7 または 5.8 で使用できること、およびブートディスクイメージ (番号 1 が付いた CD、または DVD) が Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションで選択されていること (「Devices」メニュー > 「CD-ROM Image」) を確認します。

インストールメディアの設定方法については、[14 ページ](#)の「ブートメディアオプションの選択」を参照してください。

2 サーバーをリセットするか、サーバーの電源を投入します。

例:

- ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを約 1 秒押してサーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を入れます。
- Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
- サーバー SP の Oracle ILOM CLI で、次のように入力します: `reset /System`

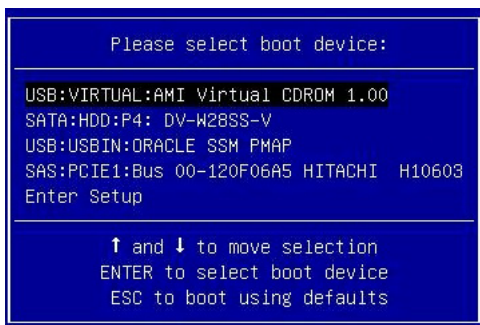
BIOS 画面が表示されます。



注- 次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。

- 3 BIOS 画面で、**F8** キーを押して、**Linux OS** のインストールで使用する一時ブートデバイスを指定します。

「Please Select Boot Device」メニューが表示されます。



注-インストール時に表示されるブートデバイスメニューは、サーバーに取り付けられているディスクコントローラのタイプによって異なる場合があります。

- 4 「Please Select Boot Device」メニューで、使用対象として選択した **Linux** メディアのインストール方法と BIOS モードに応じたメニュー項目を選択し、**Enter** キーを押します。

例:

- ローカル配布方法を使用することを選択した場合、画面から **SATA:HDD:P4 DV-W28SS-V** を選択します。
- **Oracle ILOM** リモートコンソール配布方法を使用することを選択した場合は、画面から **USB:VIRTUAL:AMI VIRTUAL CDROM 1.00** を選択します。

RHEL 5.7 または 5.8 のインストール画面が表示されます。

- 5 画面上の指示と **Red Hat** のドキュメントに従って、**Red Hat** インストールの基本設定を続行します。

インストール手順については、<http://www.redhat.com/docs/manuals/enterprise> の『Red Hat Enterprise Linux 5 インストールガイド』を参照してください。

注-Oracle Solaris OS または Oracle VM がディスクにインストール済みの場合は、ディスクをパーティションに分割してインストール済みの OS を削除するか、インストール済みの OS を削除せずにディスクをパーティションに分割し、デュアルブートオペレーティングシステムをサポートすることもできます。

- 6 Red Hat インストールの基本設定が完了したら、次に示すインストール後のタスクを実行します。
 - a. 自動更新を行うようにシステムを構成します。
詳細は、Red Hat のドキュメントを参照してください。
 - b. 必要な場合は、**RHEL 5.7** または **5.8** 用の最新の訂正とバグ修正をダウンロードしてインストールします。
詳細は、Red Hat のドキュメントを参照してください。
 - c. この章の後半で説明する、インストール後のタスクを確認し、必要に応じて実行します。
[80 ページの「RHEL のインストール後のタスク」](#)を参照してください。

▼ ローカルメディアまたはリモートメディアを使用した **RHEL 6.1**、**6.2**、または **6.3** のインストール

次の手順では、ローカルメディアまたはリモートメディアから Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 6.1、6.2、または 6.3 オペレーティングシステムのインストールをブートする方法について説明します。この手順では、次のいずれかのソースから RHEL のインストールメディアをブートすることを前提にしています。

- RHEL 6.1、6.2、または 6.3 の CD または DVD セット (内蔵または外付けの CD/DVD)
- RHEL 6.1、6.2、または 6.3 の ISO DVD イメージ

注 - PXE 環境からインストールメディアをブートする場合は、[76 ページの「PXE ネットワークブートを使用した RHEL 5.7、5.8、6.1、6.2、または 6.3 のインストール」](#)で手順を確認してください。

RHEL のインストールの詳細については、次の Web サイトで RHEL ドキュメントコレクションを参照してください: <http://www.redhat.com/docs/manuals/enterprise/>

- 1 インストールメディアをブートできることを確認します。
 - ディストリビューション CD/DVD の場合。ローカルまたはリモートの USB CD/DVD-ROM ドライブに、Red Hat 6.1、6.2、または 6.3 配布メディアのブートディスク (番号 1 が付いた CD、または単一の DVD) を挿入します。

- ISO イメージの場合。Red Hat 6.1、6.2、または 6.3 ISO イメージが使用できると、Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションでブートディスクイメージ (番号 1 が付いた CD、または DVD) が選択されていること (「Devices」メニュー> 「CD-ROM Image」) を確認します。

インストールメディアの設定方法については、14 ページの「ブートメディアオプションの選択」を参照してください。

- 2 サーバーをリセットするか、サーバーの電源を投入します。

例:

- ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを約 1 秒押してサーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を入れます。
- Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」> 「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
- サーバー SP の Oracle ILOM CLI で、次のように入力します: `reset /System`

BIOS 画面が表示されます。

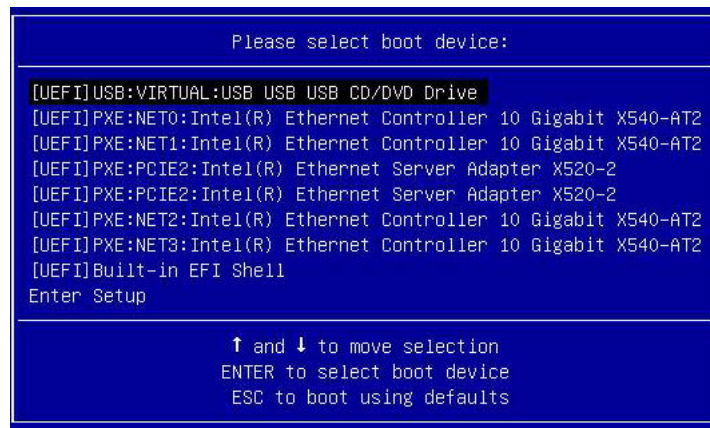


注- 次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。

- 3 BIOS 画面で、F8 キーを押して、RHEL のインストールで使用する一時ブートデバイスを指定します。表示される画面は、BIOS をレガシー BIOS モードに構成したか UEFI モードに構成したかに応じて異なります。
- レガシー BIOS の場合、次の画面が表示されます。



- UEFI BIOS の場合、次の画面が表示されます。



注-インストール時に表示されるブートデバイスメニューは、サーバーに取り付けられているディスクコントローラのタイプによって異なる場合があります。

- 4 「Please Select Boot Device」メニューで、最初のブートデバイスを内蔵、外付け、または仮想 CD/DVD デバイスから選択し、**Enter** キーを押します。

数秒後、RHEL インストールのスプラッシュ画面が表示されます。スプラッシュ画面の下半分に、説明、ファンクションキー、およびブートプロンプトが表示されます。

- 5 **Red Hat Enterprise Linux** のスプラッシュ画面で、「**Next**」をクリックして標準的な対話式インストールを続けます。

または、テキストモードで、次のコマンドを入力します。

boot: **linux text**

- 6 画面上の指示と **Red Hat** のドキュメントに従って、**Red Hat** インストールの基本設定を続行します。

インストール手順については、次の場所にある『Red Hat Enterprise Linux 6 インストールガイド』を参照してください。

<http://www.redhat.com/docs/manuals/enterprise>

注 - Oracle Solaris OS または Oracle VM がディスクにインストール済みの場合は、ディスクをパーティションに分割してインストール済みの OS を削除するか、インストール済みの OS を削除せずにディスクをパーティションに分割し、デュアルブートオペレーティングシステムをサポートすることもできます。

- 7 **Red Hat** インストールの基本設定が完了したら、次に示すインストール後のタスクを実行します。

- a. 自動更新を行うようにシステムを構成します。

詳細は、Red Hat のドキュメントを参照してください。

- b. 必要な場合は、**RHEL 6.1**、**6.2**、または **6.3** 用の最新の訂正とバグ修正をダウンロードしてインストールします。

詳細は、Red Hat のドキュメントを参照してください。

- c. この章の後半で説明する、インストール後のタスクを確認し、必要に応じて実行します。

[80 ページの「RHEL のインストール後のタスク」](#)を参照してください。

▼ PXE ネットワークブートを使用した **RHEL 5.7、5.8、6.1、6.2、または 6.3** のインストール

次の手順では、PXE ネットワーク環境から Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 5.7、5.8、6.1、6.2、または 6.3 をブートする方法について説明します。RHEL 5.7、5.8、6.1、6.2、または 6.3 の KickStart イメージ(ネットワークリポジトリ)からインストールメディアをブートすることを前提とします。

KickStart は、Red Hat の自動インストール方法です。これによりシステム管理者は、通常は一般的な Red Hat Linux のインストール中に入力される、インストールと

構成のパラメータの一部またはすべての設定を含めた、単一のイメージを作成できます。通常、KickStart イメージは1つのネットワークサーバー上に配置され、インストール時に複数のシステムによって読み取られます。

始める前に PXE ネットワークブート環境から RHEL のインストールを実行する前に、次の要件を満たす必要があります。

- KickStart イメージを使用してインストールを行う場合、次の操作が必要です。
 - KickStart ファイルを作成します。
 - KickStart ファイルを含むブートメディアを作成するか、またはネットワーク上で KickStart ファイルを使用できるようにします。
- PXE を使用してネットワーク経由でインストールメディアをブートするには、次の操作が必要です:
 - インストールツリーをエクスポートするようにネットワーク (NFS、FTP、HTTP) サーバーを構成します。
 - PXE のブートに必要なファイルを TFTP サーバー上に構成します。
 - PXE 構成からブートするように、サーバーの MAC ネットワークポートアドレスを構成します。
 - DHCP (動的ホスト構成プロトコル) を構成します。

次の場所にある『Red Hat Enterprise Linux 5: System Administration Guide』の PXE ネットワークインストール手順に従ってください:

<http://www.redhat.com/docs>

- 1 PXE ネットワーク環境が正しく設定され、RHEL のインストールメディアを PXE ブートで 사용할 수 있는 것을 확인합니다.

- 2 서버를 리셋するか, 서버의 전원을投入합니다.

例:

- 로컬 서버의フロント패널にある電源 버튼을約 1 秒押し 서버의電源を切り、もう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を入れます。
- Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
- 서버 SP の Oracle ILOM CLI で、次のように入力します: `reset /System`

BIOS 画面が表示されます。



注- 次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。

- 3 BIOS 画面で、**F8** キーを押して、**RHEL** のインストールで使用する一時ブートデバイスを指定します。

表示される画面は、BIOS をレガシー BIOS モードに構成したか UEFI モードに構成したかに応じて異なります。

注- RHEL 5.7 および 5.8 はレガシー BIOS モードのみをサポートしています。これらのバージョンでは、UEFI BIOS モードはサポートされていません。

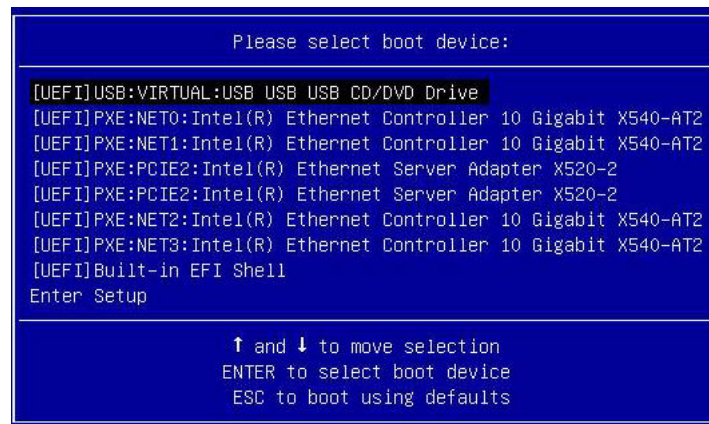
- RHEL 5.7 および 5.8 の場合、次の画面が表示されます。



- レガシー BIOS モードの RHEL 6.1、6.2、および 6.3 の場合、次の画面が表示されます。



- UEFI BIOS モードの RHEL 6.1、6.2、および 6.3 の場合、次の画面が表示されます。



注-インストール時に表示されるブートデバイスメニューは、サーバーに取り付けられているディスクコントローラのタイプによって異なる場合があります。

- 4 「Please Select Boot Device」メニューで、PXE ネットワークインストールサーバーと通信するように構成されたネットワークポートを選択して、**Enter** キーを押します。ネットワークブートローダーが読み込まれ、ブートプロンプトが表示されます。数秒後、インストールカーネルの読み込みが開始されます。

- 5 インストールを続けるには、73 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用した RHEL 6.1、6.2、または 6.3 のインストール」の手順5を参照してください。

RHELのインストール後のタスク

Red Hat Enterprise Linux (RHEL) のインストールの完了後、次のインストール後のタスクを確認し、必要に応じて、使用しているシステムで該当するタスクを実行するようにしてください。

- 80 ページの「RHEL を登録し自動更新を有効にする」
- 80 ページの「(オプション) ローカルまたはリモートコンソールを使用して RHEL に Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux をインストールする」

RHEL を登録し自動更新を有効にする

Red Hat Enterprise Linux (RHEL) をインストールしたあと、RHEL サブスクリプションをアクティブ化してソフトウェアの自動更新を受信するようにしてください。詳細は、次の Web サイトにある Red Hat のサポートを参照してください。

<http://www.redhat.com/apps/support/>

▼ (オプション) ローカルまたはリモートコンソールを使用して RHEL に Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux をインストールする

Red Hat Enterprise Linux OS をインストールしたあと、Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux をインストールして使用することもできます。

- 始める前に Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux をインストールする前に、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 5.7、5.8、6.1、6.2、または 6.3 をサーバーにインストールしておく必要があります。

この手順では、4つのシナリオの手順について説明します。

- RHEL 5.7 への Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 1 のインストール
- RHEL 5.8 への Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 のインストール
- RHEL 6.1 への Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 1 のインストール
- RHEL 6.2 および 6.3 への Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 のインストール

このカーネルをインストールするには、次の手順を実行します。

注 - この手順では、システム上の `yum` がデフォルトの `/etc/yum.repos.d` ディレクトリでリポジトリファイルを検索するように構成されていることを前提としています。

- 1 **Oracle Unbreakable Enterprise Kernel** をインストールする前に、システムで **Red Hat Enterprise Linux 5.7、5.8、6.1、6.2、または 6.3** が動作していることを確認します。
- 2 システムで動作している **OS** に応じて、適切なリポジトリファイルのダウンロードおよび編集を実行します。

- **RHEL 5.7 または 5.8** が動作している場合は、次の手順を実行して、**Oracle Linux 5 yum** リポジトリファイルをダウンロードし、編集します。

a. `# cd /etc/yum.repos.d`

b. `# wget http://public-yum.oracle.com/public-yum-el5.repo`

c. エディタで `public-yum-el5.repo` ファイルを開きます。

- d. `[el5_u5_base]` スタンザと `[ol5_u5_base]` スタンザの両方を編集して、次のように `enable=0` を `enable=1` に変更します。

```
[el5_u5_base]
name=Enterprise Linux $releasever Update 5 installation media copy ($basearch)
baseurl=http://public-yum.oracle.com/repo/EnterpriseLinux/EL5/5/base/$basearch/
gpgkey=http://public-yum.oracle.com/RPM-GPG-KEY-oracle-el5
gpgcheck=1
enabled=1
```

```
[ol5_u5_base]
name=Oracle Linux $releasever Update 5 installation media copy ($basearch)
baseurl=http://public-yum.oracle.com/repo/OracleLinux/OL5/5/base/x86_64/
gpgkey=http://public-yum.oracle.com/RPM-GPG-KEY-oracle-el5
gpgcheck=1
enabled=1
```

- e. **RHEL 5.7** が動作している場合は、`[OL5_UEK_base]` スタンザを編集して、次のように `enable=0` を `enable=1` に変更します。それ以外の場合は、次の手順に進みます。

```
[ol5_UEK_base]
name=Unbreakable Enterprise Kernel for Oracle Linux $releasever ($basearch)
baseurl=http://public-yum.oracle.com/repo/OracleLinux/OL5/UEK/base/$basearch/
gpgkey=http://public-yum.oracle.com/RPM-GPG-KEY-oracle-el5
gpgcheck=1
enable=1
```

- f. RHEL 5.8が動作している場合は、**[ol5_UEK_latest]** スタンザを編集して、次のように **enable=0** を **enable=1** に変更します。

```
[ol5_UEK_latest]
name=Latest Unbreakable Enterprise Kernel for Oracle Linux $releasever ($basearch)
baseurl=http://public-yum.oracle.com/repo/OracleLinux/OL5/UEK/latest/$basearch/
gpgkey=http://public-yum.oracle.com/RPM-GPG-KEY-oracle-el5
gpgcheck=1
enable=1
```

- RHEL 6.1、6.2、または 6.3 が動作している場合は、次の手順を実行して、Oracle Linux 6 yum リポジトリファイルをダウンロードし、編集します。
 - a. **# cd /etc/yum.repos.d**
 - b. **# wget http://public-yum.oracle.com/public-yum-ol6.repo**
 - c. エディタで **public-yum-ol6.repo** ファイルを開きます。
 - d. **[ol6_ga_base]** スタンザを編集して、次のように **enable=0** を **enable=1** に変更します。

```
[ol6_ga_base]name=Oracle Linux $releasever GA installation media copy ($basearch)
baseurl=http://public-yum.oracle.com/repo/OracleLinux/OL6/0/base/$basearch/
gpgkey=http://public-yum.oracle.com/RPM-GPG-KEY-oracle-ol6
gpgcheck=1
enable=1
```

- e. RHEL 6.1 が動作している場合は、**[ol6_UEK_latest]** および **[ol6_UEK_base]** スタンザを編集して、次のように **enable=1** と **enable=0** の設定を変更します。それ以外の場合は、[手順 3](#)に進みます。

```
[ol6_UEK_latest]
name=Latest Unbreakable Enterprise Kernel for Oracle Linux $releasever ($basearch)
baseurl=http://public-yum.oracle.com/repo/OracleLinux/OL6/UEK/latest/$basearch/
gpgkey=http://public-yum.oracle.com/RPM-GPG-KEY-oracle-ol6
gpgcheck=1
enable=0
```

```
[ol6_UEK_base]
name=Unbreakable Enterprise Kernel for Oracle Linux $releasever ($basearch)
baseurl=http://public-yum.oracle.com/repo/OracleLinux/OL6/UEK/base/$basearch/
gpgkey=http://public-yum.oracle.com/RPM-GPG-KEY-oracle-ol6
gpgcheck=1
enable=1
```

- 3 システムカーネルを **Oracle Unbreakable Enterprise Kernel** に更新するには、次のいずれかを実行します
 - **RHEL 5.7** または **5.8** が動作している場合は、次のいずれかを実行して、システムカーネルを更新します。
 - システムカーネルを更新するには、次のコマンドを入力します。
`# yum install kernel`
または
 - システムカーネルを更新し、関連するすべての推奨パッケージをアップグレードするには、次のコマンドを入力します。
`# yum install oracle-linux`
 - **RHEL 6.1**、**6.2**、または **6.3** が動作している場合は、次のいずれかを実行して、システムカーネルを更新します。
 - システムカーネルを更新するには、次のコマンドを入力します。
`# yum install kernel-uek`
または
 - システムカーネルを更新し、関連するすべての推奨パッケージをアップグレードするには、次のコマンドを入力します。
`# yum update`
- 4 新しくインストールした **Oracle Unbreakable Enterprise Kernel** を実行するには、システムをリブートします。

注 - Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux の詳細については、次の場所にあるリリースノートを参照してください: <https://www.oracle.com/technetwork/server-storage/linux/downloads/index.html>

メディアを使用した **SUSE Linux Enterprise Server** の単一システムへのインストール

このセクションでは、SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 SP1 および SP2 for x86 (64 ビット) をインストールする手順について説明します。

ここでは、次のトピックを取り上げます。

- [84 ページの「SLES 11 SP1 および SP2 のインストールのタスマップ」](#)

- 85 ページの「準備作業」
- 86 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して SLES 11 SP1 または SP2 をインストールする」
- 95 ページの「PXE ネットワークブートを使用して SLES 11 SP1 または SP2 をインストールする」
- 97 ページの「SLES 11 SP1 または SP2 のインストール後のタスク」

SLES 11 SP1 および SP2 のインストールのタスクマップ

これらの手順では、SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 SP1 および SP2 オペレーティングシステムのインストール手順について説明します。

手順	説明	手順
1.	サーバーハードウェアを設置し、Oracle ILOM サービスプロセッサを構成します。	<ul style="list-style-type: none">■ 『設置』、「サーバーのラックへの設置」■ 『設置』、「サーバーの配線」■ 『設置』、「Oracle ILOM への接続」
2.	SLES インストールメディアを入手します。	次を参照してください: http://www.suse.com/products/server/
3.	『プロダクトノート』を確認します。	『Sun Server X3-2 プロダクトノート』: http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=SunServerX3-2
4.	インストールの実行に使用するコンソール、SLES メディア、およびインストール先を設定します。	<ul style="list-style-type: none">■ 12 ページの「コンソール表示オプションの選択」■ 14 ページの「ブートメディアオプションの選択」■ 17 ページの「インストール先オプションの選択」
5.	OS の新規インストール用に BIOS 設定を指定します。	23 ページの「BIOS の設定」
6.	ネットワーク接続をサポートするように、SLES 11 SP1 オペレーティングシステムを構成します。	28 ページの「ネットワーク接続をサポートするための SLES 11 SP1 オペレーティングシステムソフトウェアの構成」
7.	SLES OS をインストールします。	<ul style="list-style-type: none">■ 86 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して SLES 11 SP1 または SP2 をインストールする」■ 95 ページの「PXE ネットワークブートを使用して SLES 11 SP1 または SP2 をインストールする」

手順	説明	手順
8.	インストール後のタスクを適宜実行します。	97 ページの「SLES 11 SP1 または SP2 のインストール後のタスク」

準備作業

次の要件が満たされていることを確認します。

- インストールの実行前に、コンソール表示オプションが選択および設定されている必要があります。このオプションと設定手順の詳細については、[12 ページの「コンソール表示オプションの選択」](#)を参照してください。
- ブートメディアオプションは、インストールの実行前に選択および設定するようにしてください。このオプションと設定手順の詳細については、[14 ページの「ブートメディアオプションの選択」](#)を参照してください。
- インストール先オプションは、インストールの実行前に選択および設定するようにしてください。このオプションと設定手順の詳細については、[17 ページの「インストール先オプションの選択」](#)を参照してください。
- BIOS 設定が適切に指定されたことを確認します。BIOS 設定を確認し、必要に応じて設定する手順については、[23 ページの「BIOS の設定」](#)を参照してください。
- ネットワーク接続をサポートするように、SLES 11 SP1 オペレーティングシステムソフトウェアを構成します。詳細は、[28 ページの「ネットワーク接続をサポートするための SLES 11 SP1 オペレーティングシステムソフトウェアの構成」](#)を参照してください。

注 - SLES 11 SP2 をインストールしている場合、SLES 11 SP2 にはサーバーの 10 ギガビット Ethernet (10GbE) コントローラをサポートするのに必要なドライバが含まれているため、ネットワーク接続をサポートするようにオペレーティングシステムを構成する必要はありません。

- ローカルインストールの場合、プロンプトが表示されたときに、接続された物理 CD/DVD-ROM ドライブに挿入できる SLES OS インストールメディアを用意します。
- リモートインストールの場合、Oracle ILOM リモートコンソールシステムの CD/DVD-ROM ドライブに SLES OS のインストールメディアを挿入します。Oracle ILOM リモートコンソールシステムの「Devices」メニューで「CD-ROM」を選択していることを確認します。

- SLES OS イメージを使用している場合は、Oracle ILOM リモートコンソールシステムから SLES OS ISO イメージにアクセスできることを確認します。Oracle ILOM リモートコンソールシステムの「Devices」メニューで「CD-ROM Image」を選択していることを確認します。
- オペレーティングシステムをインストールするための該当するインストール前提条件をすべて満たしているべきです。これらの前提条件については、[23 ページ](#)の「オペレーティングシステムのインストールの準備」を参照してください。

▼ ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して **SLES 11 SP1** または **SP2** をインストールする

この手順では、SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 SP1 または SP2 オペレーティングシステムをローカルメディアまたはリモートメディアからブートする方法について説明します。この手順では、次のいずれかのソースから SLES 11 のインストールメディアをブートすることを前提とします。

- SLES 11 SP1 または SP2 の CD または DVD セット (内蔵または外付けの CD/DVD)
- SLES 11 SP1 または SP2 の ISO DVD イメージ

注 - PXE 環境からインストールメディアをブートする場合は、[95 ページ](#)の「PXE ネットワークブートを使用して SLES 11 SP1 または SP2 をインストールする」でブート手順を確認してください。

SLES 11 SP1 および SP2 のインストールについては、次の場所にある SUSE Linux Enterprise Server のドキュメントコレクションを参照してください:

<http://www.suse.com/documentation/sles11/>

1 インストールメディアがブートに使用できることを確認します。

- ディストリビューション CD/DVD の場合。ローカルまたは外付けの CD/DVD-ROM ドライブに、**SLES 11 SP1** または **SP2** ブートディスク (番号 1 が付いた CD、または DVD) を挿入します。
- ISO イメージの場合。**SLES 11 SP1** または **SP2 ISO** イメージが使用できること、およびブートディスクイメージ (番号 1 が付いた CD、または DVD) が Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションで選択されていること (「Devices」メニュー > 「CD-ROM Image」) を確認します。

インストールメディアを設定する方法については、[14 ページ](#)の「ブートメディアオプションの選択」を参照してください。

2 サーバーをリセットするか、サーバーの電源を投入します。

例:

- ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを約 1 秒押してサーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を入れます。
- Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
- サーバー SP の Oracle ILOM CLI で、次のように入力します: `reset /System`

BIOS 画面が表示されます。



注- 次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。

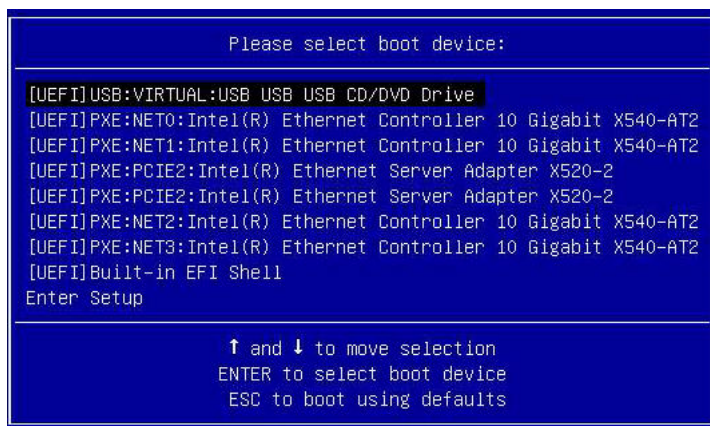
3 BIOS 画面で、F8 キーを押して、SLES OS のインストールで使用する一時ブートデバイスを指定します。

「Please Select Boot Device」メニューが表示されます。表示される画面は、BIOS をレガシー BIOS モードに構成したか UEFI モードに構成したかに応じて異なります。

- レガシー BIOS の場合、次の画面が表示されます。



- UEFI BIOS の場合、次の画面が表示されます。



注-インストール時に表示されるブートデバイスメニューは、サーバーに取り付けられているディスクコントローラのタイプによって異なる場合があります。

- 4 「Please Select Boot Device」メニューで、使用対象として選択した **SLES OS** メディアのインストール方法と BIOS モードに応じたメニュー項目を選択し、**Enter** キーを押します。

たとえば、Oracle ILOM リモートコンソール配布方法を選択した場合は、レガシー BIOS 画面から USB:VIRTUAL:AMI VIRTUAL CDROM 1.00 を選択するか、UEFI BIOS 画面から [UEFI]USB:VIRTUAL:USB USB CD/DVD Drive を選択します。

SUSE Linux ブート画面が表示されます。

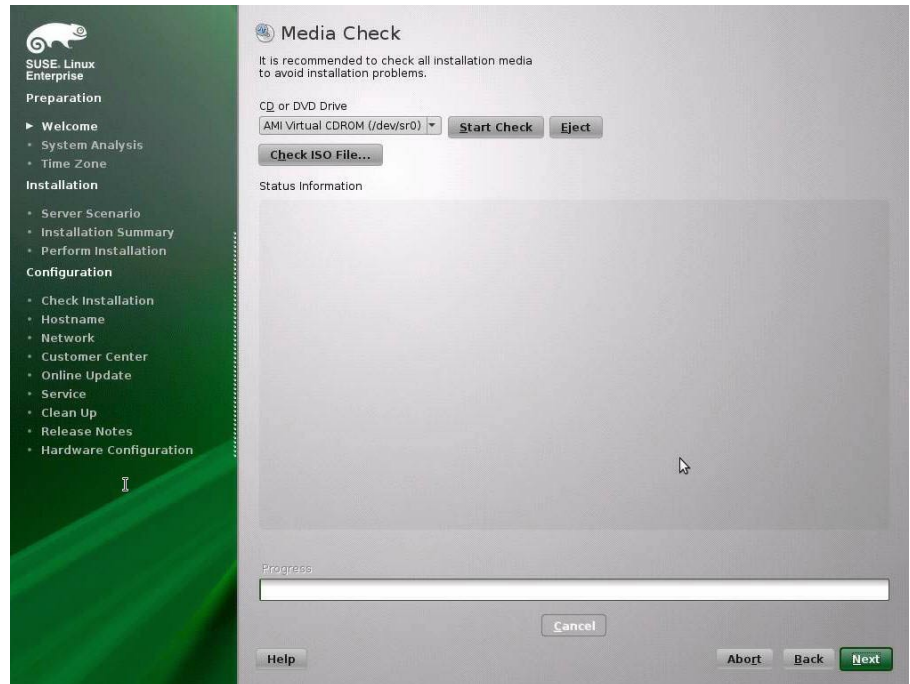


- 5 最初の SUSE ブートインストール画面で、**Tab** キーを使用して 2 番目のオプション「**Installation**」を選択し、**Enter** キーを押します。
「Welcome」画面が表示されます。

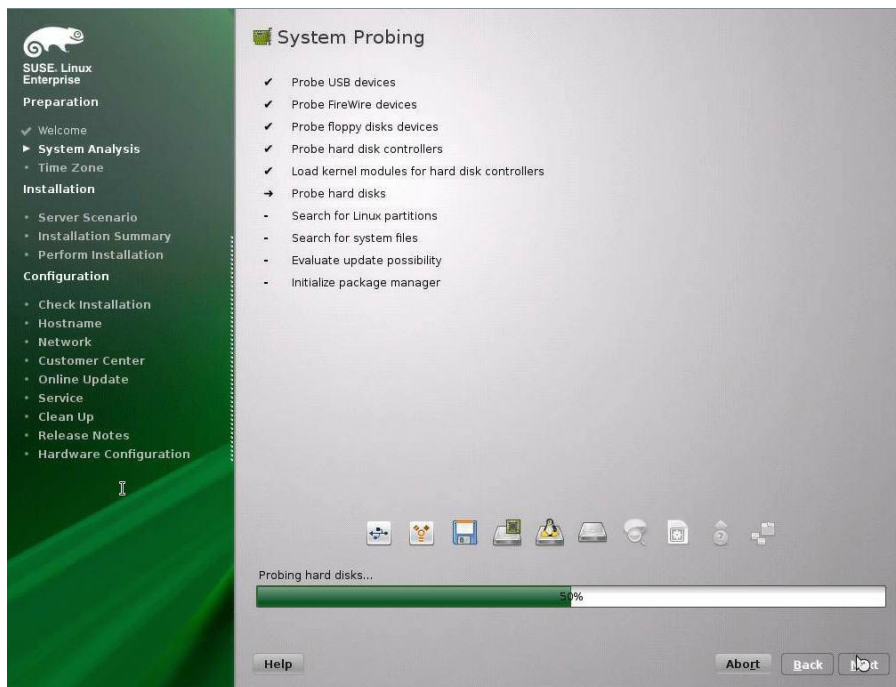


- 6 「Welcome」画面で、次の手順を実行します
 - a. 適切な言語を選択します。
 - b. キーボードレイアウトを選択します。
 - c. ライセンス契約を読み、それに同意します。

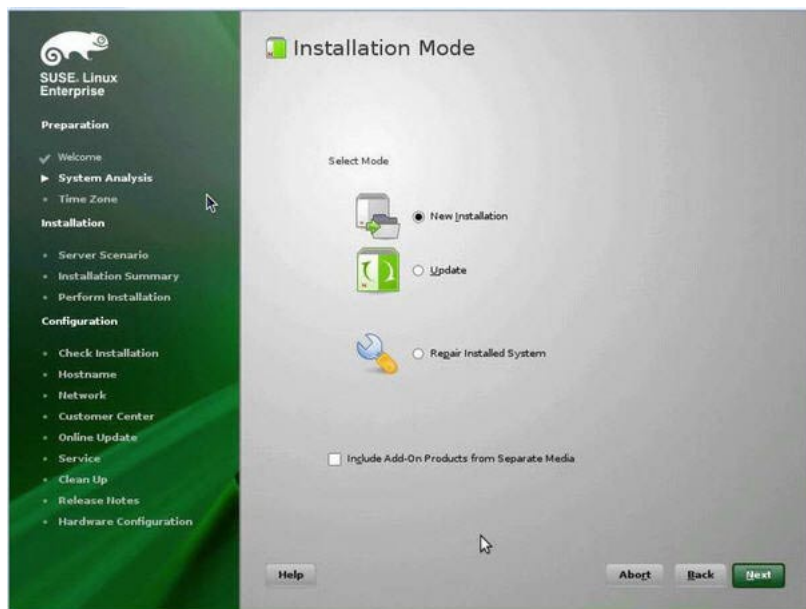
- d. 「Next」をクリックします。
「Media Check」画面が表示されます。



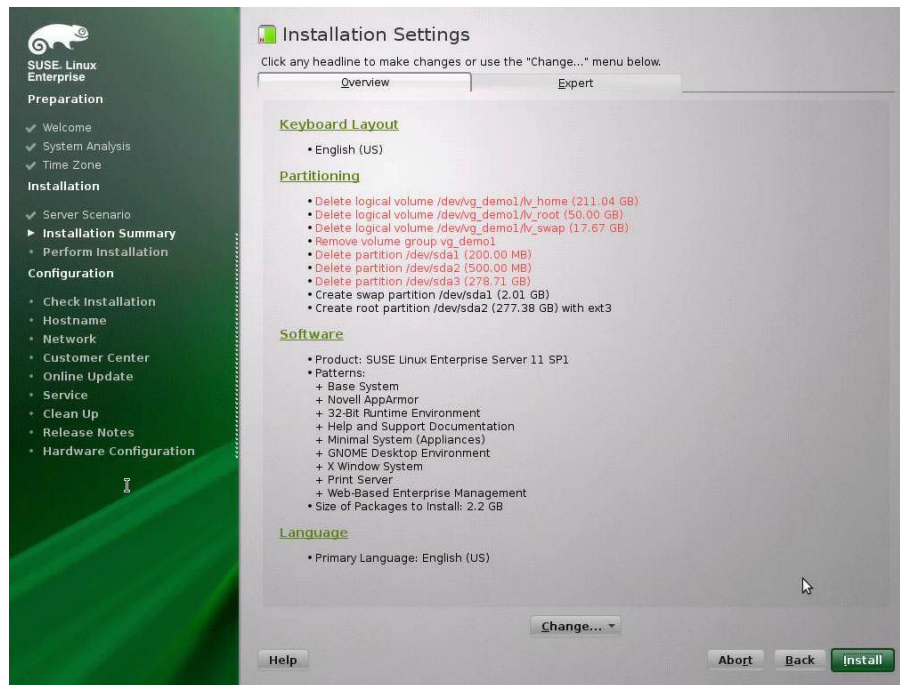
- 7 今回はじめて、このメディアからインストールを実行している場合は、メディアをテストすることをお勧めします。それ以外の場合は、「Next」をクリックして、手順9に進みます。
- 8 メディアを確認するには、次の手順を実行します。
- a. メディアタイプを選択し、「Start Check」ボタンをクリックします。
- b. メディアの確認が終了したら、「Next」をクリックします。
「System Probing」画面が表示されます。



システムの分析が完了したら、「Installation Mode」画面が表示されます。



- 9 「Installation Mode」画面で「New Installation」を選択して、「Next」をクリックします。
「Clock and Time Zone」画面が表示されます。
- 10 「Clock and Time Zone」画面で、適切な地域とタイムゾーンを選択して、「Next」をクリックします。
「Server Base Scenario」画面が表示されます。
- 11 「Server Base Scenario」画面で「Physical Machine」を選択し、「Next」をクリックします。
「Installation Settings」画面が表示されます。



- 12 「Installation Settings」画面で、次のいずれかの手順を実行します。
 - 「Install」をクリックして、表示されているインストール設定を受け入れます。
または
 - 「Change」をクリックして設定を編集してから、「Install」をクリックして変更した設定でインストールします。

注-カスタムパーティションの作成方法、またはその他のインストール設定の編集方法については、SLES 11 のドキュメントを参照してください。

「Confirm Package License」画面が表示されます。

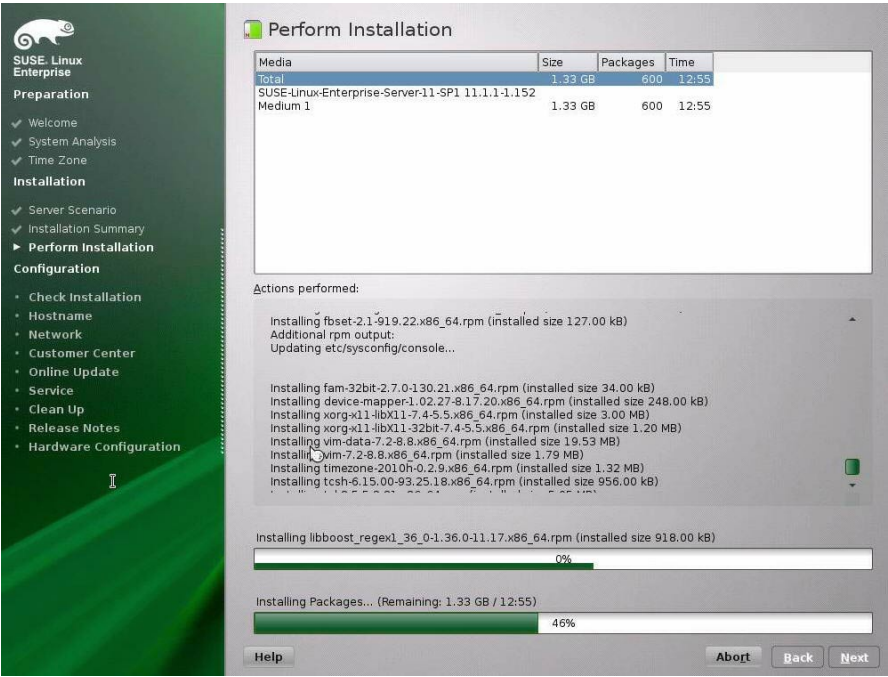
13 「Confirm Package License」画面で、次の手順を実行します。

- a. 使用許諾契約を読みます。
- b. 「I Agree」をクリックします。
- c. 「Install」をクリックします。

「Confirm Installation」ダイアログが表示されます。

14 「Confirm Installation」ダイアログで、メッセージを読み、「Install」をクリックしてインストールを開始します。

「Perform Installation」ダイアログが表示されます。



15 SLES 11 SP1 OS のすべてのファイルがインストールされてシステムがリブートされるまで、インストールの基本設定を続行します。

- 16 インストールの基本設定が完了し、システムがリブートしたら、**SLES 11** ドキュメントを参照して次のタスクを実行します。
 - a. 使用するアカウントのパスワードを作成します。
 - b. インターネットアクセスおよびネットワーク設定を構成してテストします。
 - c. OSを登録し、オペレーティングシステムで使用できる最新のアップデートをダウンロードします。
- 17 97 ページの「**SLES 11 SP1 または SP2 のインストール後のタスク**」で説明するインストール後のタスクを確認し、必要に応じて実行します。

参考 関連情報

- 97 ページの「**SLES 11 SP1 または SP2 のインストール後のタスク**」

▼ PXE ネットワークブートを使用して **SLES 11 SP1** または **SP2** をインストールする

この手順では、PXE ネットワーク環境から SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 SP1 または SP2 をブートする方法について説明します。次のソースからインストールメディアをブートすることを前提にしています。

- SLES 11 SP1 または SP2 の AutoYaST イメージ(ネットワークリポジトリ)

AutoYaST を利用すると、SLES オペレーティングシステムを複数のシステムにインストールできます。AutoYaST を使用した自動インストールの準備方法については、次の場所にある SUSE のドキュメントコレクションを参照してください:

<http://www.suse.com/documentation/sles11/>

始める前に PXE ネットワークブート環境から SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 のインストールを実行する前に、次の要件を満たす必要があります。

- AutoYaST を使用してインストールを行う場合は、次の操作が必要です。
 - AutoYaST プロファイルを作成します。

SUSE Linux Enterprise Server 11 のドキュメントに記載された AutoYaST のインストール手順に従います。

- PXE を使用してネットワーク経由でインストールメディアをブートするには、次の操作が必要です:
 - インストールツリーをエクスポートするようにネットワーク (NFS、FTP、HTTP) サーバーを構成します。

- PXE のブートに必要なファイルを TFTP サーバー上に構成します。
- PXE 構成からブートするように、サーバーの MAC ネットワークポートアドレスを構成します。
- DHCP (動的ホスト構成プロトコル) を構成します。

SUSE Linux Enterprise Server のドキュメントに記載された、ネットワーク経由で SUSE メディアをブートするための設定手順に従います

この手順を完了したあとで、[97 ページの「SLES 11 SP1 または SP2 のインストール後のタスク」](#)の実行が必要になることがあります。

- 1 PXE ネットワーク環境が正しく設定され、SLES のインストールメディアを PXE ブートで利用できることを確認します。

- 2 サーバーをリセットするか、サーバーの電源を投入します。

例:

- ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを約 1 秒押してサーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を入れます。
- Oracle iLOM Web インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
- サーバー SP の Oracle iLOM CLI で、次のように入力します:`reset /System`

BIOS 画面が表示されます。



注- 次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。

- 3 BIOS 画面で、**F8** キーを押して、一時ブートデバイスを指定します。
「Please Select Boot Device」メニューが表示され、使用可能なブートデバイスが一覧表示されます。
- 4 ブートデバイスメニューで、使用している **PXE** ネットワークインストールサーバーと通信するように構成された **PXE** インストールブートデバイス (物理ポート) を選択して、**Enter** キーを押します。
ネットワークブートローダーが読み込まれ、ブートプロンプトが表示されます。タイムアウトしてインストールカーネルの読み込みが開始されるまで 5 秒待ちます。
最初の SUSE Linux ブート画面が表示されます。
- 5 インストールを続けるには、**86 ページ**の「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して **SLES 11 SP1** または **SP2** をインストールする」の手順 5 に進みます。

参考 関連情報

- [97 ページの「SLES 11 SP1 または SP2 のインストール後のタスク」](#)

SLES 11 SP1 または SP2 のインストール後のタスク

SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 SP1 または SP2 のインストール後、次のトピックを確認し、使用しているオペレーティングシステムに必要なタスクを実行してください。

- [97 ページの「Sun Storage PCIe 内蔵ホストバスアダプタに必要なドライバのダウンロードとインストール」](#)
- [98 ページの「SLES オペレーティングシステムを更新する」](#)

Sun Storage PCIe 内蔵ホストバスアダプタに必要なドライバのダウンロードとインストール

注 - 追加ドライバは、SLES 11 SP1 をインストールする場合にのみ必要です。SLES 11 SP2 をインストールした場合は、このセクションを無視してもかまいません。

Sun Storage PCIe ホストバスアダプタ (HBA) 用の更新された LSI ドライバは、Novell の Partner Linux Driver Program (PLDP) で入手できます。サーバーで次のどちらかの HBA を使用している場合は、SLES 11 SP1 のインストール後にこれらのドライバをダウンロードしてインストールするようにしてください。

- Sun Storage 6 Gb SAS PCIe HBA、内蔵 (SC-SAS6-INT-Z)
- Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID HBA、内蔵 (SC-SAS6-R-INT-Z)

これらのドライバは、Novell PLDP LSI Web サイト http://drivers.suse.com/driver-process/pub/update/LSI/sle11sp1/common/x86_64/ で入手できます。

使用できるドライバは、SLES 11 SP1 標準カーネル (非 XEN) 用に 2 つ、SLES 11 SP1 XEN カーネル用に 2 つの合計 4 つあります。使用しているカーネルに適した 2 つのパッケージをインストールしてください。

SLES 11 SP1 の標準カーネル (非 XEN) の場合は、次のドライバをインストールします。

- lsi-megaraid_sas-kmp-default-00.00.06.12_2.6.32.12_0.7-1.x86_64.rpm。これは次で入手できます。http://drivers.suse.com/driver-process/pub/update/LSI/sle11sp1/common/x86_64/lsi-megaraid_sas-kmp-default-00.00.06.12_2.6.32.12_0.7-1.x86_64.rpm
- lsi-mpt2sas-kmp-default-12.00.00.00_2.6.32.12_0.7-1.1.x86_64.rpm。これは次で入手できます。http://drivers.suse.com/driver-process/pub/update/LSI/sle11sp1/common/x86_64/lsi-mpt2sas-kmp-default-12.00.00.00_2.6.32.12_0.7-1.1.x86_64.rpm

SLES 11 SP1 の XEN カーネルの場合は、次のドライバをインストールします。

- lsi-megaraid_sas-kmp-xen-00.00.06.12_2.6.32.12_0.7-1.x86_64.rpm。これは次で入手できます:http://drivers.suse.com/driver-process/pub/update/LSI/sle11sp1/common/x86_64/lsi-megaraid_sas-kmp-xen-00.00.06.12_2.6.32.12_0.7-1.x86_64.rpm
- lsi-mpt2sas-kmp-xen-12.00.00.00_2.6.32.12_0.7-1.1.x86_64.rpm。これは次で入手できます:http://drivers.suse.com/driver-process/pub/update/LSI/sle11sp1/common/x86_64/lsi-mpt2sas-kmp-xen-12.00.00.00_2.6.32.12_0.7-1.1.x86_64.rpm

▼ SLES オペレーティングシステムを更新する

SUSE Linux Enterprise Server (SLES) OS のインストールメディアには、最新バージョンのオペレーティングシステムが含まれていない場合があります。次の手順では、サーバーの SLES OS を更新する方法について説明します。

- 1 **SLES** サーバーにスーパーユーザーとしてログインします。
- 2 次のコマンドを入力して、**YaST** オンラインアップデートを実行します。

you

YaST はテキストモードとグラフィカルモードの両方で動作することに注意してください。ここでの指示は、両方に適用されます。

- 3 サーバーがネットワークファイアウォールで保護されていて、インターネットにアクセスするためにプロキシサーバーを使用する必要がある場合は、まず正しいプロキシ情報で YaST を構成する必要があります。

- a. 「**Network Services**」タブを選択してから、右側の「**Proxy**」画面を選択します。HTTP フィールドと HTTPS フィールドの両方に、正しいプロキシの URL を入力します。

注 - ネットワーク HTTP または HTTPS プロキシを介してオンライン update サービスを正常に機能させるために、次の追加の構成手順を実行する必要があります。

- b. YaST ユーティリティーを終了して、次のコマンドを実行します。

```
rug set-prefs proxy-url proxy_URL
```

ここでは、*proxy_URL* は、プロキシサーバーの完全修飾 URL です (たとえば、`http://proxy.yourdomain:3128/`)。

- c. コマンドの実行の成功後に、YaST を再度起動します。

- 4 SUSE Customer Center に登録します。

注 - SUSE Customer Center のユーザー名とパスワード、および SLES 製品のアクティベーションコードが必要です。

- a. 「**Software**」タブを選択します。

- b. 「**SUSE Customer Center Configuration**」を選択し、指示に従います。

- 5 登録後、「**Online Update**」タブを選択して、ソフトウェアの更新を実行します。

ネットワークインタフェースの構成

このセクションでは、次の情報について説明します。

- [101 ページの「NIC コネクタ」](#)

NIC コネクタ

サーバーのネットワークインタフェースカード (NIC) コネクタには、次のように物理的にラベルが付けられています。

表1 Intel NIC コネクタのラベル

Intel NIC コネクタのラベル	インタフェースタイプ
net0	1 番目のインタフェース (Intel ixgbe 0)
net1	2 番目のインタフェース (Intel ixgbe 1)
net2	3 番目のインタフェース (Intel ixgbe 2)
net3	4 番目のインタフェース (Intel ixgbe 3)

注 - 単一プロセッサシステムでは、NET 2 および NET 3 は機能しません。

サーバーファームウェアとソフトウェアの入手

このセクションでは、サーバーのファームウェアとソフトウェアにアクセスするためのオプションについて説明します。

説明	リンク
サーバーファームウェアとソフトウェアのアップデートについて学びます。	103 ページの「ファームウェアとソフトウェアのアップデート」
ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプションについて学びます。	104 ページの「ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション」
使用可能なファームウェアとソフトウェアパッケージを確認します。	104 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」
Oracle System Assistant、My Oracle Support、または物理メディアのリクエストにより、ファームウェアおよびソフトウェアパッケージにアクセスします。	106 ページの「ファームウェアとソフトウェアへのアクセス」
ファームウェアとソフトウェアのアップデートをインストールします。	110 ページの「更新のインストール」

ファームウェアとソフトウェアのアップデート

ファームウェアとソフトウェア (サーバーのハードウェアドライバやツールなど) は定期的に更新されます。これらは、ソフトウェアリリースとして入手可能になります。ソフトウェアリリースは、サーバー用の使用可能なファームウェア、ハードウェアドライバ、ユーティリティをすべて含んだ一連のダウンロード (パッチ) です。これらすべては、まとめてテスト済みです。ダウンロードに含まれる ReadMe ドキュメントには、以前のソフトウェアリリースからの変更点および変更されていない点について説明されています。

サーバーのファームウェアとソフトウェアは、ソフトウェアリリースが入手可能になり次第、更新してください。ソフトウェアリリースにはしばしばバグの修正が含まれるため、更新により、サーバーソフトウェアと、最新のサーバーファームウェアおよびほかのコンポーネントのファームウェアとソフトウェアとの互換性が保証されます。

ダウンロードパッケージ内の ReadMe ファイルには、ダウンロードパッケージ内の更新されたファイル、および現在のリリースで修正されたバグに関する情報が含まれます。プロダクトノートには、サポートされるサーバーソフトウェアのバージョンに関する情報も含まれます。

ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション

次のオプションのいずれかを使用して、使用しているサーバーに対応した最新のファームウェアとソフトウェアを取得します。

- **Oracle System Assistant** – Oracle System Assistant は、出荷時にインストール済みの Oracle x86 サーバー用オプションで、サーバーのファームウェアとソフトウェアを簡単にダウンロードおよびインストールできます。
Oracle System Assistant の使用に関する詳細は、『管理』、「Oracle System Assistant を使用したサーバーの設定」を参照してください。
- **My Oracle Support** – すべてのシステムファームおよびソフトウェアは、<http://support.oracle.com> の My Oracle Support から入手できます。
My Oracle Support の Web サイトで入手できるデータの詳細については、[104 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」](#)を参照してください。
My Oracle Support からソフトウェアリリースをダウンロードする手順については、[106 ページの「My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード」](#)を参照してください。
- **物理メディアのリクエスト (PMR)** – My Oracle Support から入手可能なダウンロード (パッチ) を含む DVD をリクエストできます。
詳細については、[107 ページの「物理メディアのリクエスト」](#)を参照してください。

入手可能なソフトウェアリリースパッケージ

My Oracle Support でのダウンロードは、プロダクトファミリ、製品、バージョンの順でグループ分けされています。バージョンには1つ以上のダウンロード (パッチ) が含まれます。

サーバーとブレードの場合、パターンは似ています。製品はサーバーです。サーバーごとにリリースセットが含まれます。これらのリリースは、実際のソフトウェア製品リリースではなく、サーバーの更新リリースのことです。これらの更新はソフトウェアリリースと呼ばれ、まとめてテスト済みの複数のダウンロードで構成されます。各ダウンロードには、ファームウェア、ドライバ、またはユーティリティが含まれます。

次の表に示すように、My Oracle Support には、このサーバーファミリ向けの同じダウンロードタイプのセットが含まれます。これらも、物理メディアのリクエスト

(PMR)を行なって依頼できます。Oracle System Assistant を使用しても、同じファームウェアおよびソフトウェアをダウンロードできます。

パッケージ名	説明	このパッケージをダウンロードするタイミング
Sun Server X3-2 (X4170 M3) SWversion – ファームウェアパック	Oracle ILOM、BIOS、およびオプションカードファームウェアを含む、すべてのシステムファームウェア。	最新のファームウェアが必要です。
Sun Server X3-2 (X4170 M3) SWversion – OS パック	OS Pack は、サポートされるオペレーティングシステムのバージョンごとに入手できます。各 OS Pack には、その OS バージョン用のツール、ドライバ、およびユーティリティのパッケージすべてが含まれます。 ソフトウェアには、Oracle Hardware Management Pack および LSI MegaRAID ソフトウェアが含まれます。 Windows OS の場合、この OS Pack には Intel Network Teaming and Install Pack も含まれます。	OS 固有のドライバ、ツール、またはユーティリティを更新する必要があります。
Sun Server X3-2 (X4170 M3) SWversion – すべてのパック	Firmware Pack、すべての OS Pack、およびすべてのドキュメントを含みます。 このパックには、Oracle VTS や Oracle System Assistant イメージは含まれません。	システムファームウェアと OS 固有のソフトウェアの組み合わせを更新する必要があります。
Sun Server X3-2 (X4170 M3) SWversion – 診断	Oracle VTS 診断イメージ。	Oracle VTS 診断イメージが必要です。
Sun Server X3-2 (X4170 M3) SWversion – Oracle System Assistant	Oracle System Assistant 復旧および ISO アップデートイメージ。	Oracle System Assistant を手動で回復および更新する必要があります。

各ダウンロードは zip ファイルで、ReadMe ファイル、およびファームウェアやソフトウェアファイルを含むサブディレクトリセットが格納されています。ReadMe ファイルには、前回のソフトウェアリリース以降に変更されたコンポーネントおよび修正されたバグの詳細が記載されています。

ファームウェアとソフトウェアへのアクセス

このセクションでは、ソフトウェアリリースファイルをダウンロードまたはリクエストする手順について説明します。

Oracle System Assistant を使用して、最新のソフトウェアリリースを簡単にダウンロードして使用できます。詳細は、『管理』、「Oracle System Assistant を使用したサーバーの設定」を参照してください。

更新されたファームウェアおよびソフトウェアを入手する方法は、ほかにも My Oracle Support を使用する方法と、物理メディアをリクエストする方法の2つがあります。参照先:

- 106 ページの「My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード」
- 107 ページの「物理メディアのリクエスト」

▼ My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード

- 1 次の Web サイトに移動します。 <http://support.oracle.com>
- 2 My Oracle Support にサインインします。
- 3 ページ上部にある「パッチと更新版」タブをクリックします。
「パッチと更新版」画面が表示されます。
- 4 「検索」画面で、「製品またはファミリ (拡張)」をクリックします。
画面に検索フィールドが表示されます。
- 5 「製品」フィールドで、ドロップダウンリストから製品を選択します。
あるいは、目的の製品が表示されるまで製品名のすべてまたは一部を入力します。例: サーバー。
- 6 「リリース」フィールドで、ドロップダウンリストからソフトウェアリリースを選択します。
- 7 「検索」をクリックします。
ダウンロードできるパッチが一覧表示されます。

入手できるダウンロードの説明については、104 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」を参照してください。

- 8 ダウンロードするパッチを選択するには、そのパッチをクリックします (Shift キーを使用すると、複数のパッチを選択できます)。
アクションパネルがポップアップ表示されます。ポップアップパネルには、「計画に追加」および「ダウンロード」オプションを含め、いくつかのアクションオプションがあります。「計画に追加」オプションの詳細は、関連するドロップダウンボタンをクリックして、「なぜ計画を使用するのですか。」を選択してください。
- 9 パッチをダウンロードするには、ポップアップアクションパネルの「ダウンロード」をクリックします。
「ファイル・ダウンロード」ダイアログボックスが表示されます。
- 10 「ファイル・ダウンロード」ダイアログボックスで、パッチの **zip** ファイルをクリックします。
パッチファイルがダウンロードされます。

物理メディアのリクエスト

Oracle Web サイトからダウンロードできない場合は、物理メディアのリクエスト (PMR) で最新のソフトウェアリリースを入手できます。

次の表に、物理メディアをリクエストするためのハイレベルタスク、および詳細情報の入手先のリンクを示します。

説明	リンク
リクエストに必要な情報を収集します。	107 ページの「物理メディアのリクエスト用の情報を収集する」
オンラインまたは Oracle サポートに電話して物理メディアをリクエストします。	108 ページの「物理メディアのリクエスト (オンライン)」 109 ページの「物理メディアのリクエスト (電話)」

物理メディアのリクエスト用の情報を収集する

物理メディアのリクエスト (PMR) を行うには、サーバーの保証またはサポート契約が必要です。

PMR を実行する前に、次の情報を収集します。

- 製品名、ソフトウェアリリースのバージョン、および必須パッチを入手します。最新のソフトウェアリリースおよびリクエストしているダウンロードパッケージ (パッチ) の名前を知っていると、リクエストを実行しやすくなります。

- *My Oracle Support* にアクセスできる場合 – 106 ページの「[My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード](#)」の説明に従って、最新のソフトウェアリリースを特定し、入手できるダウンロード (パッチ) を確認します。パッチのリストを表示したあと、ダウンロード手順を続行しない場合は「パッチ検索結果」ページからほかのページに移動できます。
- *My Oracle Support* にアクセスできない場合 – 104 ページの「[入手可能なソフトウェアリリースパッケージ](#)」の情報を使用して、必要なパッケージを特定し、最新のソフトウェアリリースのパッケージを要求します。
- 出荷情報を手元に用意します。リクエストの際に、連絡先、電話番号、電子メールアドレス、会社名、および出荷先住所を入力する必要があります。

▼ 物理メディアのリクエスト (オンライン)

始める前に リクエストを行う前に、107 ページの「[物理メディアのリクエスト用の情報を収集する](#)」に記載された情報を収集してください。

- 1 次の Web サイトにアクセスします:<http://support.oracle.com>。
- 2 **My Oracle Support** にサインインします。
- 3 ページの右上の「問合せ先」リンクをクリックします。
- 4 「リクエストの説明」セクションに、次の情報を入力します。
 - a. 「リクエスト・カテゴリ」ドロップダウンメニューで、次を選択します。
ソフトウェアおよび OS メディアリクエスト
 - b. 「リクエスト・サマリー」フィールドで、「**Sun Server X3-2** の最新ソフトウェアリリースの **PMR**」と入力します。
- 5 「リクエスト詳細」セクションで、次の表に示されている質問に回答します。

質問	回答
メディアの入手をご希望ですか。	はい
どちらの製品ラインのメディアをご希望でしょうか。	Sun 製品
パッチをダウンロードするためのパスワードに関する問い合わせでしょうか。	いいえ
CD や DVD でパッチをご希望ですか。	はい

質問	回答
パッチを CD や DVD でご希望の場合、パッチの番号、OS とプラットフォームをお知らせください。	希望するソフトウェアリリースのダウンロードごとに、パッチ番号を入力してください。
ご希望の製品名とバージョンをお知らせください。	製品名: Sun Server X3-2 バージョン: 最新のソフトウェアリリース番号
希望されているメディアの OS とプラットフォームをお知らせください。	OS 固有のダウンロードをリクエストする場合は、ここで OS を指定します。システムファームウェアのみをリクエストする場合は、「一般」と入力します。
メディアに言語は必要ですか。	いいえ

- 出荷先担当者の連絡先、電話番号、電子メールアドレス、会社名、および出荷先住所の情報を入力します。
- 「次へ」をクリックします。
- 「ファイルのアップロード」の「関連ファイル」画面で「次へ」をクリックします。
情報を指定する必要はありません。
- 「関連ナレッジ」画面で、リクエストに該当するナレッジ記事を確認します。
- 「リクエストの送信」をクリックします。

▼ 物理メディアのリクエスト (電話)

始める前に リクエストを行う前に、107 ページの「物理メディアのリクエスト用の情報を収集する」に記載された情報を収集してください。

- 次の **Oracle Global Customer Support Contacts Directory** にある該当する番号を使用して、**Oracle サポート** に電話をかけます。
<http://www.oracle.com/us/support/contact-068555.html>
- Oracle サポート** に、**Sun Server X3-2** の物理メディアの要求 (PMR) を行いたいという希望を伝えます。
 - My Oracle Support から特定のソフトウェアリリースおよびパッチ番号の情報にアクセスできる場合は、この情報をサポート担当者に伝えます。
 - ソフトウェアリリース情報にアクセスできない場合は、Sun Server X3-2 の最新のソフトウェアリリースを要求してください。

更新のインストール

次のセクションでは、ファームウェアとソフトウェアの更新をインストールする方法について説明します。

- [110 ページの「ファームウェアのインストール」](#)
- [110 ページの「ハードウェアドライバと OS ツールのインストール」](#)

ファームウェアのインストール

更新されたファームウェアは、次のいずれかを使用してインストールできます。

- **Oracle Enterprise Manager Ops Center** – Ops Center Enterprise Controller で最新のファームウェアを Oracle から自動的にダウンロードすることも、Enterprise Controller に手動でロードすることもできます。どちらの場合も、Ops Center でファームウェアを 1 つ以上のサーバー、ブレード、またはブレードシャーシにインストールできます。

詳細は、<http://www.oracle.com/us/products/enterprise-manager/044497.html> を参照してください。

- **Oracle System Assistant** – Oracle System Assistant は、最新のファームウェアを Oracle からダウンロードしてインストールできます。

詳細は、『管理』、「Oracle System Assistant を使用したサーバーの設定」を参照してください。

- **Oracle Hardware Management Pack** – Oracle Hardware Management Pack 内の fwupdate CLI ツールを使用して、システム内部のファームウェアを更新できます。

詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ohmp> で Oracle Hardware Management Pack ドキュメントライブラリを参照してください。

- **Oracle ILOM** – Oracle ILOM および BIOS ファームウェアは、Oracle ILOM Web インタフェースまたはコマンド行インタフェースを使用して更新可能な唯一のファームウェアです。

詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31> の Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ドキュメントライブラリを参照してください。

ハードウェアドライバと OS ツールのインストール

Oracle Hardware Management Pack などの、更新されたハードウェアドライバおよびオペレーティングシステム (OS) 関連のツールは、次のいずれかを使用してインストールできます。

- **Oracle Enterprise Manager Ops Center**

詳細は、<http://www.oracle.com/us/products/enterprise-manager/044497.html> を参照してください。

- **Oracle System Assistant**

詳細は、『管理』、「Oracle System Assistant を使用したサーバーの設定」を参照してください。

- JumpStart、KickStart、サードパーティーのツールなどの、その他の配備メカニズム。

詳細は、オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

索引

A

AutoYaST, SLES OS, 95

B

BIOS

出荷時のデフォルト設定の確認

Linux OS, 24

設定

Linux OS, 23

設定を編集し表示する手順, 24

レガシーモードと UEFI モードの切り替え

Linux OS, 26

I

ISO イメージ

Oracle Linux OS, 38, 48, 70

RHEL OS, 74

SLES OS, 86

K

KickStart, 64

Oracle Linux OS, 64

M

My Oracle Support, ソフトウェアリリース

パッケージのダウンロードに使用する, 106

O

Oracle Linux OS, 64

ISO イメージ, 38, 48, 70

サーバーの電源リセット, 39, 48, 65, 71, 74, 77,
87, 96

ローカルメディアまたはリモートメディアによる
インストール, 38, 48

Oracle System Assistant

OS のインストールタスク

Linux OS, 22

概要

Linux OS, 20

取得, 22

Linux OS, 22

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel

インストール, 80

説明

Linux OS, 10

P

PXE インストール, Oracle Linux OS, 64

PXE ネットワークインストール

Oracle Linux OS, 64

SLES OS, 95

R

RAID

構成

Linux OS, 30

RHEL OS

ISO イメージ, 74

自動更新, 73, 76

ブートディスクイメージ, 74

S

SLES OS

AutoYaST, 95

ISO イメージ, 86

SLES 11 のローカルメディアまたはリモートメディアによるインストール, 86

YaST オンラインアップデート, 98

自動インストールの準備, 95

ブートディスクイメージ, 86

SUSE Linux Enterprise Server, 「SLES」を参照, 83

い

一時ブートデバイス

Oracle Linux OS, 40, 49, 65, 72, 97

RHEL OS, 74, 78

SLES OS, 87

インストール

KickStart の使用

RHEL OS, 76

Oracle System Assistant の使用

Linux OS, 20, 31

PXE ネットワークブート

SLES OS, 95

PXE ネットワークブートの使用

Oracle Linux OS, 64

RHEL OS, 76

オプション

Linux OS, 18

タスクマップ

Oracle Linux OS, 36

RHEL OS, 68

SLES OS, 84

インストール(続き)

メディアの使用

Linux OS, 20

Oracle Linux OS, 35

RHEL OS, 67

SLES OS, 83

ローカルメディアまたはリモートメディアの使用

Oracle Linux OS 5.x, 38

RHEL OS 5.x, 70

RHEL OS 6.x, 73

SLES OS, 86

インストール後

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel

RHEL OS, 80

オペレーティングシステムの更新

SLES OS, 98

製品の登録

RHEL OS, 80

タスク

Oracle Linux, 67

RHEL OS, 80

SLES OS, 97

内蔵 HBA 用のドライバのインストール

SLES OS, 97

インストール先

オプション

Linux OS, 17

選択

Linux OS, 17

ドライブの制限

Linux OS, 17

ファイバチャネル Storage Area Network (SAN) デバイス

Linux OS, 18

ローカルストレージドライブ

Linux OS, 18

インストール方法, ブートメディアオプション, 14

インストールメディア, 32

お

オペレーティングシステムのインストール

概要, 9-22

オペレーティングシステムのインストール (続き)
サポートされているオペレーティングシステム, 10
オペレーティングシステムのインストールの概要, 9-22

こ

構成

RAID

Linux OS, 30

ネットワークインタフェース

Linux OS, 101

ネットワーク接続をサポートするように SLES 11 SP1 OS を構成する

Linux OS, 28

コンソール表示

オプション

Linux OS, 12

コンソール表示オプション

選択

Linux OS, 12

さ

サーバー

電源リセット, 39, 48, 65, 71, 74, 77, 87, 96

サポートされているオペレーティングシステム, 10

Linux OS, 10

し

自動更新

RHEL OS, 73, 76

せ

製品の登録

SLES 11 OS, 95, 99

そ

ソフトウェアリリースパッケージ, My Oracle Support を使用してダウンロードする, 106

た

タスクマップ

インストール

Oracle Linux OS, 36

RHEL OS, 68

SLES OS, 84

ね

ネットワークインタフェース

ラベル付け

Linux OS, 101

ふ

ファームウェアとソフトウェア

アクセスオプション, 104

オンラインでの物理メディアのリクエスト, 108

更新, 103

更新のインストール, 110

使用可能なリリースパッケージ, 104

ダウンロード, 106

電話による物理メディアのリクエスト, 109

ハードウェアドライバや OS ツールのインストール, 110

ファームウェアのインストール, 110

物理メディアのリクエストのための情報を収集する, 107

ブートディスクイメージ

Oracle Linux OS, 38, 48, 70

RHEL OS, 74

SLES OS, 86

ブートメディア

要件

Linux OS, 14

ブートメディアオプション

選択

Linux OS, 14

ブートメディアのインストール, 14

り

リモートコンソール

設定

Linux OS, 13

リモートブートメディア

設定

Linux OS, 15

要件

Linux OS, 15

ろ

ローカルコンソール

設定

Linux OS, 12

ローカルブートメディア

設定

Linux OS, 15

要件

Linux OS, 14